

冴えないヒロイン達が
幸せになり冴えたヒロ
イン達になるハナシ

ゆ————

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

安芸倫也は加藤恵と運命的な出会いをしない為倫也はゲーム作りを決意しません。

その場合のIFルートです。

ゲーム作りをしない世界線を書いています！CPは作者想定で変えている為受け入れられる人は読んでみてください。

オタクな安芸倫也がヒロインと交流する事によって始まるゲーム作りでヒロインだった人達とどのように関係していくのか。

それぞれの相手を探しながら日常を過ごしていく物語。

それぞれのヒロイン達がオリキャラ・もしくは既存キャラと付き合ったりする日常生活をベースにした物語です。

ヒロインは原作と違った形で、全員登場するのでお楽しみに！

目次

プロローグ ————— 1

一章 面接そして ————— 15

二章 バイト開始そして澤村×上郷の出

会い ————— 30

三章 霞ヶ丘詩羽の告白 ————— 42

四章 幼馴染との不意の再開はフラグ

56

五章 恋愛相談からの口説き文句

76

六章 恋愛において“転”とは最も回

避すべき事である ————— 93

七章 バンドメンバーとそのファンがり

ア充って誰が決めた ————— 105

八章 創作の醍醐味を知る事の第1歩

を歩みだした日があるとすれば今日に違

いない ————— 124

九章 これって運命？さあ分からんね〜

————— 147

十章 まさかの倫也君!? ————— 159

最終章 クリエイターと云うは死ぬこ

とと見つけたら ————— 166

プロローグ

俺の名は安芸倫也。私立豊ヶ崎学園に通う高校生だ。

普通の学園生活を送っているとどこか普通では無いのかもしれない。

俺は恋をしているのだ。勿論高校生になってリア充ライフを満喫しているという訳では無い。

俺の彼女はいつだって2次元なのだから。

今ハマっているのは恋するメトロノームというラノベ。

俺が開設ブログではハンドルネームTAKIとして恋するメトロノームの布教に1役買っているだけだ。

だから尊敬する恋するメトロノームの作者霞詩子先生の握手会では豊ヶ崎学園の2大ヒロインである霞ヶ丘詩羽先輩が作者だったと知った時は驚いた。

しかもラノベ作家本人に認知されてたのだから更に驚きだ。

「その節はありがとうございます。」

とお礼まで言われたのだから驚きだ。

そうして握手会が終わったのだから驚きだ。列の最前列に並んでいて握手をしたの

が最初だったのが幸いしたのか握手をした際に1枚のメモを渡されたのが今尚胸が高まる原因だろう。

そのメモにはラインIDが書かれていたのだから。

☆☆☆

気分を落ち着けようと散歩に出た。

尊敬する霞詩子先生から。1もなく飛びつきたい。

でも俺はあくまで1ファンに過ぎない。そんな俺が個人的に連絡を取っていい物か。非常に悩んでいる。

落ち着けよ。俺。俺はオタクの鑑であるはずだ。

発売してすぐに買った恋するメトロノームに感動して何周もした後ブログを開設。

ハンドルネームTAKIの名で恋するメトロノームを解説・宣伝。

学校の図書室にも担当の先生の所に何度も通い特別に恋するメトロノームを置かせてもらうこともできた。

そうした消費型オタクの鏡なのである。決して下心があつてお近づきになりたいと思つた訳では無い。

でも連絡先をくれたのは事実なのだ。果たしてオタクとしてはどう立ち回るのが正解なのだろう。

そう物思いに耽りながら探偵坂と呼んでいる探偵社を起点に登り坂になっているその坂の上から帽子が転がってきた。

白いベレー帽？それを拾い上げると坂の上から帽子を追いかけてきたらしい女の子がやってきたので拾った帽子を返すと礼を言い立ち去って行った。

☆☆☆

その後も物思いに耽りながら少し遠回りをして家へ帰ってきた俺は意を決してラインを開きIDを打ち込んだ。

筆とペンのアイコンだ。如何にも作家らしいアイコンだが見慣れた物だ。

それは恋するメトロノームにいつも描かれている霞詩子先生のアイコンだった。

俺は勢いそのままにラインに送る文章を打ち込んで行った。

☆

初めまして。

握手会の際はラインIDを教えてくださいありがとうございます。

尊敬する霞詩子先生と個人的にやり取りをさせて頂けるようになるのは嬉しい限りです。

ところで、話は握手会の話になりますが。

お礼をされたと思うのですが何に對してのお礼だったのでしょうか？

その事だけが引つかかっています。

教えて頂ければ幸いです。

これからも霞詩子先生の執筆活動が上手く行く事を心より願っております。

☆

書けた。送信。

オタクとして、ファンとして、間違いのないよう文章を書けたハズだ。

俺は満足して今期のアニメをチェックしながら本日のブログ更新を行った。

☆☆☆

「どうしよう。町田さん。ラインの返信が返ってきた。」

私は霞ヶ丘詩羽。私立豊ヶ崎学園に通う一方作者として恋するメトロノームの執筆をしている。

今はその担当編集の町田苑子さんと打ち合わせ中である。

「その前にしーちゃん。スマホはマナーモードにしてしまおうか。打ち合わせに集中して。」

「はいすいません。町田さん。打ち合わせの続きをしましょう。」

棒読みだったが素早く謝り打ち合わせに戻った。心はここに在らず。

握手会で連絡先を交換したTAKIこと後輩の安芸倫也君にあった訳だが。

「それじゃ次巻のプロット書いたら送ってね。それを元にまた次の打ち合わせをしましょう。」

「分かりました。できたら送ります。」

と、打ち合わせ終わりの事務的なやり取りを終えると飲みかけの冷めた紅茶を一口し再び安芸倫也君から返ってきた最初のメッセージになんと返そうか考える。

「例のTAKI君？握手会の時ファンに連絡先を渡したいって相談された時は驚いたわ。」

と、ニヤニヤしながら町田さんは話しかけてくる。

じつと町田さんを見ると、

「TAKI君、って実在するのね。最初はそのサイトを見つけた時、霞詩子がステマしてる」と編集部が騒ぎになったもの。」

とニヤニヤしながらまた安芸倫也君のブログの話をしてくる。もう何度もその話は聞いたというのに。

「でもそれは解決したんでしよう？ 何度も聞いたわ。」

ニヤニヤしながら相変わらず私を見ていた町田さんは悪戯っ子のような表情に変えた。

「そうだ、今度TAKI君を編集部に連れていらっしやい。」

「なんで!? 突然安芸倫也君を編集部に!？」

私は突然の町田さんの提案に驚きを隠せず飲もうとした紅茶を吹き出しそうになった。

「だつて、TAKI君のブログ、有耶無耶になっただけで本当の意味での解決は編集部ではしてないのよ？ 彼が編集部に来ていち熱心なファンのブログと分かれれば解決よね？」

「そんな、突然……」

私は安芸倫也君の危機かと慌てて反論しようとするのを遮り席を立つ町田さん。

「それじゃ、彼へのアポが取れたら連絡頂戴、しーちゃん。宜しくね。」

と去り際に言う町田さんは伝票を持って打ち合わせを行ってレジへ。

会計を終えると意味ありげな笑顔を浮かべ手を振り打ち合わせを行った喫茶店から

立ち去ってしまった。

☆

私が安芸倫也君のオタ活を邪魔する訳にはいかない。

きつと編集部はあのサイトの閉鎖を勧告する為に彼を編集部に呼び出しているに違いない。

ラノベ作家としての私を見出してくれた町田さんは編集部において私の恩人ではあるが。

最初に個人的にブログを開設してくれた私の作品を広めてくれた安芸倫也君は私にとつて1番の恩人だった。

発売当初は売れ行きが良くなかったが彼のブログのお陰で私の本は売れ行きが良くなり続刊も決まった。

お陰様で今も恋するメトロノームは連載する事が出来ている。

今は更なる続刊を出す為に執筆中だ。

そんな私の作品の執筆の原動力になっている彼のオタ活を私が原因で止めていいはずはない。

だから編集部とのアポを取るか迷っていた。

今は昼休み、私は1年A組の前で立ち往生していた。

事が事だけにラインでは聞けない、と思いきいそのまま彼の教室の前に来たはいいが何と話していいのか、話していいのか迷っていた。

☆☆☆

「なあ、今教室の前に二大女神の一人、霞ヶ丘先輩がいるぞ！お前も見に行かないか!?」
クラスメイトの上郷 喜彦が興奮気味に話しかけてくる。

4月にたまたま隣の席だった上郷に話しかけ恋するメトロノームを布教して以来俺のオタクトークを薦めるオタクとしての直弟子である。

「どうした？上郷。やけに興奮気味じゃないか。」

実はオタクとしては育てているが最初に薦めた恋するメトロノームの作者が霞詩子がこの学校の二大女神の一人、霞ヶ丘詩羽であるという事は上郷には伝えていない。

俺自身もこの前の握手会で初めて認知されているのを知ったばかりだったし霞ヶ丘詩羽先輩が霞詩子だと知ったばかりだ。

「二大女神という噂は本当だな。近くで見るとより一層美しい事が伝わったよ。」

今尚興奮気味の上郷は言葉を繋げる。

その時だ。扉をノックしながら恐る恐る霞ヶ丘先輩が教室に入ってきた。

「安芸君はいらっしやいますか？」

聞こえるか、聞こえないかの声で霞ヶ丘先輩は言いながら教室を見回すと俺を見つけ、急いで駆け寄ってきた。

「安芸君、話があるから放課後に校門前で待っていてくれる？」

咄嗟の事に動揺した俺は理解に遅れたがすぐに返事をする。

「分かりました。」

なんとか返事を返すと直ぐに霞ヶ丘先輩は踵を返しながら、

「それじゃ。」

と言い教室を去っていった。

しばらく呆然としていた上郷が俺へ詰め寄る。

「おい！オタクなお前が何故二大女神が一人と放課後の約束をしている!？」

至極当然の反応である。俺は学校生活始まってすぐにオタ活資金の為、校則で禁止されているアルバイトをする為に担任の元へ通ったり、学園祭でアニメ上映する為視聴覚室を借りるために職員室に通った為学校では悪目立ちしてはいるが典型的なオタクな俺に浮いた話などあるはずが無い。

それが今日突然学校の二大女神と噂される一人の霞ヶ丘詩羽先輩と放課後の約束。入学して以来の友達の上郷と言えど驚きを隠せなかったのだろう。

彼女が実はラノベ作家で実は俺達と同じ穴の貉である事を伝えれば簡単だったが俺の原因で霞ヶ丘先輩の余計な噂を立てられるのは避けたい。

さて、どうするか。

「まあ、アレだ。真面目にバイトを頑張る俺にも春が来た、つてどこかな？」

「なんだよそれ。言い逃れしたつもりか？ 抜け駆けしやがって。」

冗談めかして答えると上郷がしつかり落ち込んでいる。

「霞ヶ丘先輩がお前に振り向くというなら二大女神のもう一人、柏木エリを俺に紹介してくれ。」

二大女神の柏木エリは俺の幼馴染だ。昔色々あつて小学3年の時に仲違いして以来話してはいなかった。

上郷にオタク活を推し薦める上でこのことを話したのだった。だから無闇にオタクだと公言すると傷になることもあると。

「お前なあ。前に話したろ。俺とえりりは…」

「それだよ倫也。」

ビシツと指さしてきた上郷。

「どれだよ上郷。」

それに対して何がどれか分からず質問する俺。

得意気に話す上郷。

「仲違いしたと言う割にお前は柏木エリの事をニックネームで呼んでいる。それに小学の時の話だろ？ 案外もう忘れてるかも。」

「どうかな？ 仲違いは決定的だった。周りはそう言うかもしれないが俺達はもう…」
昔の仲違いを思い出し気が滅入るが上郷はお構い無し。

「まあ、そう言わずに。俺を助けると思ってる。」

「…考えとくよ。」

俺は上郷の熱意に仕方なく答えるのだった。

☆

そして放課後。俺はそわそわしながら約束通り校門に向かう。

すると校門前で待っている霞ヶ丘先輩を見つけた。

もう待ってる。俺が待ってる、って約束だったのに。

多少の緊張をしながらも話しかける。

「あの、お待たせしてすみません。」

目を閉じ立ったままの霞ヶ丘先輩はそのまま目を開けずに俺へと話しかける。

「ええ、待ったわ。私が待ってる、と言ったのにまさか私が待たされることになるとは。」

そう言われ俺は慌てて謝る。

「すいません。今日は帰り前の担任の話が長くて。お待たせしてしまいました。」

「あら、言い訳から入るのは良くないわね。でも素直に謝ったのは褒めてあげる。」

そう言われて重ねて謝ると、

「着いてきて。」

と、言われ霞ヶ丘先輩について行くと近くのファミレスに入った。

俺は適当にサイドメニューを頼むと霞ヶ丘先輩はケーキセットを頼んだ。

「それで…えっと…なにか御用でしたか?」

俺は遠慮がちに黙る霞ヶ丘先輩に聞いてみた。

「ええ、用が無くこうしてお茶できる関係性だとも?」

その台詞を聞いて少し安心した。

だって、異性とこうしてお茶してるなんて俺の思い描くリア充そのものだったからだ。だ。

危なく勘違いする所だった。落ち着け。

「えっと、用事とは?」

「町田さん…うちの担当編集が会いたいと言っていたので…」

用事を話した霞ヶ丘先輩は苦虫を潰したような、と言えるかは分からないが少なくとも嬉しそうな申し出ではなさそうだ。

「えっと、呼び出しという事ですか？俺がやってるファンサイトに問題でも？という事でしようか？」

「察しがいいのね、安芸倫也君。そういう事よ。」

霞ヶ丘先輩は冷静に戻ったみたいだ。

「どうやら、俺が作成した霞詩子先生のファンサイトが問題になっているらしい。」

誰かに何を言われた訳でもないが俺のファンサイトで少しでも霞詩子先生のラノベを少しでも応援出来れば、と思って作ったサイトだったのだが…。

「分かりました。そういう事であれば仕方ないですね。いつ行けば宜しいですか？」

「こつちで日程を決めて連絡が欲しいと言われたわ。候補日をいくつか教えてくれたらこちらで町田さん…担当編集と決めておくけれど。」

「事前に言って頂ければ放課後のこの時間なら大丈夫です。」

日程に関する会話を終えたと思ったがおuzzおuzzと霞ヶ丘先輩は更に聞いてきた。

「あの、アルバイトをしてる、って聞いたけど。そちらは大丈夫？」

霞ヶ丘先輩にそこまで気を使ってもらってる。そう思ったら頬が緩んでしまいそうになる。緩みそうなのを我慢しながら、

「バイトは朝に新聞配達をしてるので、問題ないです。お気遣いありがとうございます。」

チラツと霞ヶ丘先輩がどういう表情をしているのか表情を見ようとしたがティークアップに目を落しながらなので表情が分からなかった。でも確かに「それなら良かった。」と小さな声で言った。

☆

霞ヶ丘先輩と約束をしてしまった。

しかも、今日ってまるでデートみたいだった。

☆☆☆

俺達は始めてこの時の選択を喜んだ。

きつといつかこの日が運命の日だったとお互いに振り返って言うに違いない。

一章 面接そして

爽やかな朝。休みの日から秋晴れの清々しい空気の中駅に向かった俺。

普段は金曜夜から寝ずに今期のアニメランニングや昨シーズン見切れなかったアニメの復習などをする時間に充てるのだが珍しく早めに寝た。

それは今日のイベントの為だ。オタクの鑑である俺が俺が2次元でなく3次元を優先したのには理由がある。最近ハマっているサイトに関して編集部から呼び出しを受けたのだ。

これは呼び出しに応じサイトの維持を交渉しなければいけない。

俺は先週の霞ヶ丘先輩との通話を振り返りながら駅へと向かう足を進める。

金曜日の夜アニメランニングをしていると通話を知らせる着信音が鳴る。今期密かに人気があるアニソンのオープニングのイントロが流れる。

俺はイントロが終わり歌い出しに入る前に発信元が霞ヶ丘先輩である事を確認して電話に出る。

「こんばんは。霞ヶ丘先輩。こんな時間にいきなりどうしたんですか？」

「ごめんなさい。こんな夜中に。編集部と連絡できたから。」

こんな時間に編集部と連絡できたんだ。バ○マン見た時に思ったけどやっぱり編集部ってハードなんだな。漫画とラノベの違いがあっても編集部は編集部なんだな、と思う。

「こんな時間に。お疲れ様です。霞ヶ丘先輩。執筆活動もあるのに。」

「構わないわ。執筆の方は順調に進んでいるから。読者のあなたも私の書いた本を手を取る姿を思い浮かべれば筆も進むわ。」

不意な俺の為に書いている、というような言葉を聞いて頬がほころんでしまう。一読者として嬉しい気持ちになってしまう。

「それはそうと、来週の土曜の朝9時よ。編集部に呼び出されたわ。」

具体的な日付が決まった、と拳に力が入る。

「そうですか。分かりました。土曜日の朝9時ですね。」

再度確認を取ると更に確認を、と話があった。

「後は服装。制服で、と言われたわ。後は筆記用具を持っていくことと、待ち合わせは不死川書房前に10分前には集合ね。」

「分かりました。形式ばってますね。普段の打ち合わせもそんな感じなんですか?」

「普段の打ち合わせは喫茶店でやってるわ。編集部にわざわざ行くなんて事。滅多に

…」

しばらく間が空く。霞ヶ丘先輩も思う事があるようだ。

「それじゃ、安芸倫也君のサイトが存続するといいわね。それじゃ、執筆活動があるからまたね。」

「いえ、こちらこそありがとうございます。次巻も期待しています。」
純粋な応援の気持ちを口にして通話を切る。

☆

こうして1週間前の会話を思い出しながら歩いてしていると不死川書店に辿り着いた。

霞ヶ丘先輩を探していると後ろから声を掛けられる。

「あら、早いよね。まだ30分前よ?」

霞ヶ丘先輩には本当に意外そうな顔で驚かれた。

「昨日はアニメを見ずにちゃんと早寝早起きしましたから。待ち合わせが集合時間前だったので緊張で早く来ましたよ。」

「偉いわね。それじゃ、早めに来たんだし早めに行きましょうか。」

「え?早めにですか!?!ちよつと心の準備が…」

俺は慌てて深呼吸する。

1回深呼吸すると霞ヶ丘先輩が自動ドアの扉を開けてしまった。

え?!まだ心の準備が…。

今度はそう言う暇さえ許されなかった。

☆

不死川書店のビルに入るとまず霞ヶ丘先輩が担当編集に気付いたようだった。

「町田さん。今日は宜しくお願いします。」

「あら、丁寧ね。今日はどうしたの？しーちゃん。急に改まつちやつて。」

「ちよつと。安芸倫也君の前であだ名で呼ばないでよ。町田さん。」

急にこつちの様子を伺いながら霞ヶ丘先輩が町田さんと声を掛けられた女性に訴えていた。

この人が例の編集部を担当の人かな？

苦勞してそうだな。

心無しか疲れてるように見える。

俺は心配になつて声を掛ける。

「大丈夫ですか？編集部つてこの時間に出社するなんて無理してないですか？」

俺の声に町田さんは笑顔で応える。

「大丈夫よ。確かに編集部はこの時間に出社しない事もあるけど。会議ある時とかはこの時間だし。他部署との交流でこの時間に出社する事もあるからね。」

と、町田さんはこちらに近付いてきてジャケットの胸の内ポケットの中に手を入れな

がら俺の前に来た町田さんは名刺入れを出し自分の名刺を取り出した。

そして名刺入れの上に名刺を置きこちらに差し出ししながら、

「改めまして町田苑子と申します。宜しくお願いします。」

「ご丁寧ありがとうございます。一学生の俺に丁寧な対応をして頂きありがとうございます。改めまして安芸倫也と申します。宜しくお願いします。」

社会人のマナーとか名刺差し出された時の挨拶が分からないが先に挨拶してくれた町田さんの挨拶を真似て挨拶を試してみた。

それからお辞儀を試してみた。

見様見真似だったけど大丈夫だろうか？

お辞儀を終えるとチラツと町田さんの顔色を伺う。

「あら、学生なのにキツチリしてるのね。これなら大丈夫そうかな？」

ん？大丈夫そう？って言った？

試された？でも合格なのかな？よく分からないけど幸先良さそう。これならブログ存続に向けた交渉も上手く行きそうだ。

そう思った時だった。

「それじゃ、こちらへどうぞ。」と町田さんにエレベーター前へ案内された。

フロアボタンを2つ押した町田さんに気付き霞ヶ丘先輩が町田さんに声を掛ける。

「あら？今日は編集部では？」

「しーちゃんも編集部で打ち合わせ。先に編集部行って待ってて頂戴。」

町田さんが相変わらず霞ヶ丘先輩をあだ名呼びし編集部へ通される。俺はと言うと会議室の一室に案内された。

☆☆☆

編集部に通されて待っていると町田さんが戻ってきて打ち合わせが始まる。

町田さんがその口火を切った。

「恋するメトロノームは売れ行きが順調だから予定通り5巻で完結できそうよ。思い通りの話にできそう？」

前回の打ち合わせで第3巻のプロットを練り2週間かけて作った実際のプロットを送ったばかりだった。

もう完結の話になる？と疑問に思っただけで町田さんに問いかける。

「ええ。その場合は昨日送ったプロットでそのまま話を展開させられそう。最初思い描いてた通りの展開で終われそうよ。けど、まだ第3巻の執筆段階でもう完結のお話を？」

「ええ。しーちゃんはまだ若いでしょう？もう次回作をどうするのか、という話になってきてるわ。期待の新人を第1作で眠らせておくのは勿体ないという事で。」

成程。編集部には色々と思惑はあるらしい。

私は溜息をつけて町田さんへどう返すか考える。

しかし、今執筆している恋するメトロノームの事以外に今は考えられない。

それに……安芸倫也君の方はどうなっているのか。

てつきり一緒に話すのかと思いきや……。別々の場所になっちゃったし。その心配がある。今では作品の話を出来そうにない。

「次回作に関しては恋するメトロノームを無事終えてからじっくり考えたいわ。でもできればまた恋愛を書きたいと思っています。それより……」

安芸倫也君の事を聞きたい。それを聞こうとしたのに町田さんはそれを遮るように話してくる。

「恋愛物でも問題ないと思うわ。だけど工夫は必要かも。第1作目がヒットしてからの第2作目は大事よ。しーちゃんの持ち味は消したくないけど恋するメトロノームのよいうな設定だと二番煎じ、と飽きられちゃう。ファンを離さないようにしつつも新たなファンを付けられる作品を作り上げていきましよう。」

今日の町田さんは次に拘っているようだった。私はその言葉を聞いてそれもそうね、

と頷きはしたけど。心の中では安芸倫也君の様子がどうなっているか気になり視線を町田さんではなく宙へ泳がせてしまう。その視線に町田さんが気付いたのか話を交える。

「安芸君が気になる？しーちゃん。」

「え？ええ、てつきり私と一緒に話すものと思っていたから。」

町田さんへ自分の心情を伝えると打ち合わせと同様真剣な眼差しのまま現状について話してくれる。

「実はね。今日次回作の話をしたのは彼を連れてきた事と関係してるの。」

「どういう事ですか？」

「今日彼を呼んだのはね。彼のサイトで恋するメトロノームの売り上げを上昇させた能力を上げ目を付けたからよ。」

上、というワードが出てきて私には緊張が走る。

変わらず緊張の面持ちで話を続ける。

「彼の能力を借りれば更なる売り上げを見込める。それを見込まれてプロジェクトをスタートさせたいらしいわ。今日はそれを実現させる為の面接と言ったところね。ただまだ彼は学生だしそんなに重責を担わせられないからまずはアルバイトとして彼を雇いたいみたいよ。」

唐突に次回作の話になった理由を町田さんは話し出す。その話には私は驚きを隠せなかったが嬉しきも込み上げてきた。

「ファンだった彼と名実共に一緒に作品を作り上げることができる。その期待に胸を膨らませた。」

そこへ町田さんは水を差す。

「勿論入社したらバイトと言えど彼は社員になる。しーちゃんの作品だけに集中できな
くはなるし。彼は編集部じゃないと思うけれどね。」

「編集部じゃない!? 私のサポートや町田さんのサポートと言う事じゃないんですか?」

町田さんに咄嗟に反論してしまつたが町田さんは真つ直ぐこつちを見て反論をい
な
す。

「彼はしーちゃんに優しすぎると思うの。しーちゃんの一番のファンだしね。編集はそ
れに時にダメ出しをしなきゃいけない仕事だし。それに、上が目を付けたのがあのサイ
トだったから。広報部辺りが狙つてるんじゃないかしら。」

話の口ぶりが恐らく町田さんの推測だと思ふけど間違つては無さそうだ。納得の一
言である。

「あのサイトを公式のファンサイトにするという事でしようか?」

「さすがにあれはファンサイトだし、しーちゃんの事を話してるからあれは個人的に続

ける事になりそうよ。私はまだまだ下の方だから上の方の考えは分からないけど。」

最後に自嘲気味に答えた町田さんはこの話を終わらせて打ち合わせは恋するメトロノームの次巻の話をしていった。

次回作を成功させる為にもしつかり恋するメトロノームを終わらせなければ。安芸倫也君の話を聞いて尚更その気持ちが強まっていた。

☆☆☆

町田さんに通されて会議室に入ると重々しい空気だった。学校の視聴覚室にあるような長机を挟み向こうにはスーツを着込んだ2人の社員であろう人が座り待ち構えていた。

先程のロビーでの町田さんとのやり取りや社会人が主役の今期の社会派のアニメを思い出しながら挨拶をする。

「この度はお忙しい中お時間を頂きありがとうございます。」

主人公が面接へ言った第1話を思い出しながら挨拶をした後にお辞儀をする。するとアニメ通りにどうぞおすわり下さいと着席を許される。

「失礼します。」と更に言いお辞儀をしてから背筋をなるべく伸ばし着席すると今度は社

員が挨拶をする。

「この度は不死川書店にお越し頂きありがとうございます。私は不死川書店編集部の岩垣と申します。」

編集部と名乗った。俺のサイトを問題視している中心の人だろうか、と考えていると隣の社員が今度は挨拶をした。

「同じく不死川書店の広報部の右隣と申します。今日は来てくれてありがとうございます。」

編集部の人の右隣にいるから右隣だろうか。

あれ？俺からすれば右隣だが本人達からすれば左隣では？あれ？緊張で 上手く考えられない。するとその右隣から話があった。

「霞詩子のファンサイトを見たよ。あれは自作で？」

早速ファンサイトに関して触れられた。遂にサイト閉鎖に関して言及された。なんとか閉鎖を避けなければ。どう返答したらいいだろうか？

正直に答えるべきだろうか。

「はい。霞詩子先生の作品に中学生の頃出会いました感動しまして。当時は中学生でアルバイトを出来ずに布教用に本を買う余裕も無いので、それならブログを作って布教しようと思っていました。」

正直に答えると社員の2人は頷いてくれる。頷きながらも岩垣と名乗った社員が何

かをメモを取っている。

それを右隣と名乗った社員が更に質問してくる。

「ホームページを作る技術は独学で？」

サイトの話に関して更に聞かれる。ここで質問の回答を間違えればサイト閉鎖の報告だろうか。そう思いながら正直に応える。

「はい。独学で。今はグ○ツたら色々な作り方も載ってますから。それを見ながら試行錯誤して作りました。」

それを聞いた社員が感心した様子をしながら頷く。

特に右隣の領きが大きいき事から関心が大きいと思われる。

「ではサイトを作る際に心掛けたことは？」

更にサイトの事に関して細かく聞かれた。

これは遂に細かい内容を聞かれるに違いない。

いよいよ話が核心に迫って来たな。サイトを閉鎖させる話になっていくに違いない。

「それではあなたを動物に例えると？」

「はい!?!動物ですか?動物。動物に例えると…」

急な話の展開に戸惑い言い淀んでしまう。不味い。何とか間を繋がないと。あのアニメでも面接の時無言の時間があるのはダメだと言ってた気がする。

「少し考える時間を頂けますか？」

「いいでしょう。その理由も含めて考えてみてください。」

メモを取りながら俺の話を聞く社員と受け入れる社員。これは…本当に面接なのか?!と疑ってしまう。

それよりも動物に例えると何なのか考えないと。

好きな事となると一所懸命。脇目も振らず…となると猪とかだろうか。

マイナスの要素が無いのか? 悪い印象にならないだろうか?

「はい。自分を動物に例えると猪です。何故なら好きな事には脇目も振らず一所懸命になるからです。」

「成程。その情熱が布教用のサイト作成にも繋がったんですね。」

頷きながらそう言ってくれる社員。その言葉には好印象な雰囲気があった気がする。気の所為じゃ無きやいいけど。

その後2、3の質問に答えていく。質問の内容は不死川書店にどんな印象があるか、や不死川書店に関連するホームページ等を見たことあるかという質問だった。それに對しても正直に答える。

何故なら俺のホームページを作るにあたり参考に不死川書店さんのホームページを参考にした部分があったからだ。

☆☆☆

「以上かしらね。今日の打ち合わせはこんな所でしょ。」

そう言い町田さんはそくさと席を立ち上がる。

向こうの結果も気になるし私も安芸倫也君の所へ向かいたい。

「分かりました。それでは。」

私も続けて立ち上がるうとした時にエレベーターホールから安芸倫也君が来たみたい。

エレベーターホールに向かった町田さんが先に安芸倫也君と話している。

多少の距離があつたから会話の内容があまり聞き取れない。

足早にエレベーターホールに向かった私は合流に加わろうとする。

すると町田さんは「それじゃ、私はこれから外出るからまたね。」

と言ひ残りエレベーターへ乗つて移動してしまつた。ほんの数秒だつたと思うが町田さんとの会話に気になつて聞いてみる。

「ねえ。町田さんと何の話してたの？」

「え、今日どうだったかを聞かれました。それで。」

それを聞いた私は安芸倫也君の話をさえぎって思わず質問してしまう。

「会議室での結果はどうだったの!?! サイトは存続!?!」

私が危惧していたサイトの存続を反射的に聞いていた。

すると安芸倫也君は安心した表情を見せ話し出す。

「それが、今日は全然俺が運営してるサイトの話じゃなかったんですよ。全くの無関係では無かったですよ。」

勿体付けた言い方だったがサイトの閉鎖勧告では無かったようで私は安心して思考を一旦放棄してしまった。

「良かった。」

そう呟くとふっ、と安心して一息したので安芸倫也君の声を耳に聞いていなかった。

「実は今日面接だったみたいで。異例ではあるんですけど。俺が運営してるサイトの集客力を見込まれての入社試験を兼ねた面談だったんです。ヘッドハンティング的なみたいで待遇?とかの提案の話なんかもあって。」

その話を聞き入れていなかった私は後にいい意味で衝撃を受けるのだった。

二章 バイト開始そして澤村×上郷の出会い

冴えない

2章

バイト開始そして澤村×上郷の邂逅

それはある日の昼休み。

上郷 喜彦と話していた。

「この前話した2大女神が1人澤村スペンサー英梨々を紹介してくれる件どうなった!?」

いきなり勢い込んでくるから何事かと思った。

そういえばそんな話したっけな。

「そう簡単に行くかよ。俺らが小学生の頃に決定的な決別をしたんだ。幼馴染とは言えそう気安く話しかかれる間柄じゃないんだ。」

そうかよ、と流す上郷。

しかしここで俺がここで英梨々と話さざるを得ない話をされたのだった。

「ところで、この前お前が澤村スペンサー英梨々の事を柏木エリって言ってたけどあ

れってあの同人作家の!? E g o i s t i c — l i l y の作家なのか!」

「あ……しつ!!」

慌てて人差し指に指をあて上郷を黙らせる。

「その件に関しては黙っててくれ。それと、その事を俺が言ったことは内密にしてくれ。」

俺の気持ちを察した上郷は分かちつたと素直に応じてくれた。

午後の授業は冷や汗が止まらなかつた。

☆

その夜俺は早速行動へ移した。

小学生時代に決定的な絶交をした英梨々だが高校に入ってから同人誌の手伝いをする為夏前に英梨々の所へ通った時に連絡先を交換していたのが活きた。

プルルルと呼出音が耳に響く。

ワンコールもせずに英梨々は通話に出た。

「何。」

そこに喜びのようなプラスの感情は込められていない。マイナスで怒りに似た感情がおそらく込められている。

邪魔をしないでくれ、そんなルビを振られてそんな一言だ。

俺は恐る恐る話を切り出す。

「実は同級生の友達に英梨々を紹介してくれというやつがいてな。」

「はあ？却下。あんたのヲタ友になんか興味無い。以上。話はそれだけ？」

冷たくあしらわれたが俺は食い下がる。

「実はだな。その時にものの弾みでお前が柏木エリだという事を言ってしまったでな……なんとか口止めはしたから口外はしないとと思うが。」

ただでさえ冷たかった声が更に冷たくなる。そこに怒気も孕んでいく。

「はあ!?信じらんない！私がどれだけヲタバレを気にしているか知っている癖に。はあ……まあいいわ。条件は何？」

怒気を孕んだと思ったが少しの間が空きそれは無くなつていったように思えた。

「いいのか!」「もう言ってしまったものはしょうがないでしょう。それよりその友達が口を開かないようにしなきゃいけないでしょ？何、その弱みで私を脅して性奴隷にでもするつもり？」

「それはお前の同人誌お得意の展開だろ。そんなんじゃないだろ、さすがに。俺の友達を紹介させてくれればいい。後は英梨々が好きにしろよ。ヲタ友になれるならそれでもいい。ダメならまたフェードアウトすればいいだろ。」

小学の俺達のように。それは口には出さなかったがそれを察したのか英梨々はしば

し黙る。

そして「そんなんでいいの？なら早くして？ヲタバレ防ぎたいから学校で、とかはやめて欲しいわ。」

すんなり許可が下りて俺は意表を突かれた。これから土下座をして何とか許しを貰わねば、と思っていたのだがその苦労はしなくて済んだようだ。

「私も興味あるわ。倫也が育てたヲタ友とやらに。」

英梨々が某赤い彗星が白いモビルスーツに挑んで行きそうな気概を見せて通話は終了した。

☆☆☆

着信を終えると不在着信が来てる事に気付く。

霞ヶ丘先輩からの着信だった。直ぐに折り返しの電話をかけると先輩はワンコールもせずに電話を取った。

「話し中だけど忙しかった？それなら日を改めるけど。」

「いえいえ、すいません。友達と少し電話してまして。今は大丈夫です。どうしたんですか？」

「この前の事を詳しく聞きたくて電話をしたんだけど。」

霞ヶ丘先輩がいつもの調子ではなく少し下手に聞いてくる。

「ああ、この前の不死川書店の件ですよ。すみません。まだ正式な答えを貰ってなくてですね。まだ言えないんですよ。」

「私にも言えないって事？」

「そうなんです。すみません。必ず一番に報告するので答えが出るまで待つてもらっていいですか？」

「分かったわ。楽しみにしてるわね。」

「必ずしもいい返事とは限らないので期待はしないでいてもらえますか？学生の、しかも高校生のアルバイト採用なんて前例がない事ですから。」

「そこはあなたの主人公パワーで何とかなるでしょう？」

「漫画やラノベならそれで上手く行くんですけど。きつとそんな甘い世界では無いですよ。」

そうだ。俺は面接へ行って会社の人と話して実感してしまった。社会に出る、仕事をするという事がそんなに甘くないという事を。

「兎に角返事を待つ事にするわ。それじゃ。」

俺はそれでもいい返事を期待していたかった。

その返事を貰ったのはこの通話をしてすぐだった。

☆

1週間後、不死川書店。俺は遂にアルバイトとして入社してオフィスにいる。

「安芸君、これから宜しく頼むよ。」

面接でお会いした右隣さんに紹介された。勿論左隣に立たされ挨拶した。

「安芸倫也です。高校生ですが宜しくお願いします！」

簡素に自己紹介をしてお辞儀をすると「お願いしまゝす」「宜しく」と社員から挨拶されるが目線をチラリと見せてくれた社員もいたが目線を自分のデスクのPCに目を離さずに挨拶をしている人もいた。

右隣さんはすぐに仕事の説明に移る。

「高校生のアルバイトを雇うのが初めてだからね。仕事内容は変わる可能性はあるが。ホームページの作成の補助の仕事が基本になる。当面は社員の高尾君に付いて仕事してもらおう。」

「高尾山に行くんですか？」

「初日から冗談を返すとは君もなかなかだね。そういう空気を求めてたんだよ。後、

退勤時間は基本的には20時か21時までになるけど宜しくね。」

「はい。こちらこそ宜しく願います。」

そういうと右隣さんは席へ案内してくれた。

「ここがこれから安芸君の席になるよ。出勤したらまずはタイムカードに出勤記録をつけてからここでP Cを立ち上げてくれ。帰りはP Cをシャットダウンしてからタイムカードを切る事。」

と、最初の注意事項を言われタイムカードの押し方を教わった後に隣の席の高尾山：ではなく高尾さんを紹介された。

「こちらが高尾君だ。」

すると高尾さんは椅子を近付けて挨拶をしてくれた。

「高尾 広だ。宜しく。漢字だとひろしと読み間違えられることが多いけどひろつて読むから宜しく。広報部の広で覚えてくれ。」

「安芸倫也です。宜しく願います。」

「ああ、話は聞いてるよ。T A K I君：だよ。あのホームページの集客力は凄かった。打ち切りの危機を救ったと言っても過言じゃないから。その力、是非ともうちにも宜しくー。」

「そんな、我流で組んだホームページですから。そんな私の力でも良ければいくらで

も。」

固くなって一人称を私と言ったら笑われてしまった。あのビジネス派アニメだと皆当然のように一人称私だからってつきりそうだと思った。

「上司の方とか他部署の人と話す時はそれくらい固くてもいいかもしれないが俺と話す時はそんな固くなくて大丈夫だよ。」

良かった。思ったより働きやすそうだ。

バイト初日はあつという間に過ぎた。

☆☆☆

バイトを初めて1週間が経った。最初の週末を迎える。今日は世間的には『華の金曜日』という夜だがパリピイベントに縁が無い俺は部屋に籠り学校とバイトで忙しく見れずに溜まっていたアニメの消化をしている。

「バイト始めたらアニメ見る時間作るのも一苦労だな……。」1週間のバイト疲れが溜まりウトウトしながらもアニメを見進めていく。

するとスマホに上郷からの着信の知らせが鳴り響く。アニメを停止し通話に出る。

「もしもし倫也？今大丈夫か？」上郷は俺が出るとすぐに電話に出た時の定型句で電話

先の確認をしてきた。声が多少上擦っている。上郷は明日のことで緊張しているようだった。

「おいおい。まだ明日の話だ。時間はあるんだから今から緊張してどうするんだ？」

俺は上郷の緊張を解すように冗談混じりに揶揄う。

その声を聞いた上郷は相変わらず緊張したような話し声で反論してくる。

「いやいや、お前は幼馴染だから勝手知ったる仲なんだろうけどあの学園の二大女神の1人と会うんだ。緊張はするだろ！」

幼馴染だから、というのをやや強調しながら言われたもんだから俺は多少ムツとしながら答える。

「おいおい。前も言ったけど1時冷戦状態を経験したんだ。俺も勝手は知らない仲だよ。この前ちよっとバイトして事務的な連絡をするようになったくらいの関係値だ。お前とそう変わらないよ。」

以前話したように俺と英梨々には昔仲良く話していたからと言って今仲の良いというような気持ちのいい間柄では無いのだ。

「それより英梨々と少し話したが上郷に興味あげな雰囲気は感じたぞ。」

そんな事を話したな、と某赤い彗星が連邦の実力を確かめようとする意気揚々とした台詞を思い出しながら上郷をリラックスするよう色々話をして明日の集合場所と集合時

間を確認しあつて電話を切った。

「さてと……。」俺は先程停止したアニメの画面を睨みながら明日起きないといけないから寝ないといけないがアニメを見たい気持ちの間で葛藤したが明日に備え寝ることにした。

「結局今日見てたアニメ頭に入つてこなかったな……。」また1週間溜まりそうな感じするな。

☆☆☆

翌日上郷と英梨々が自己紹介し合つたのを確認して俺は待ち合わせ場所に指定したファミレスを後にした。

2人が初対面でもまだお互い緊張しコミュ障を發揮してる状態で『まだ帰らないでくれ』という2人の視線を感じたがそれを半ば無視するように席を立つ。

「悪いが週末と言つても俺も暇じゃないんだ。俺が言い出した事じゃないし2人の間を取り持つ義務は無いはずだ。」

そして止めとばかりに「じゃ、忙しいからじゃあな。」と言つてファミレスを後にした。

今はその帰り道。家に帰りながら先週不死川書店でバイトをした際に高尾さんとの会話を思い出す。

☆

「それにしても高校生でこんな所でバイトか。将来有望だな。正社員になる気はあるのか？」

仕事内容の基礎として様々なホームページを見せてもらった時に唐突に尋ねられた。

「できれば、と思ってます。流石にそのまま入社という訳にはいかないですよね？」あわよくば、という思いで聞いたが思った通りの返答が返ってきた。

「だなあ。大卒入社が基本だしな。しかもそれなりの学歴の奴がほとんどだからな。異例中の異例で高校生バイトとしては雇う事になったが流石にそのまま入社とは行かねえんじゃないかねえの？」

「ですよね……。」と仕事の事を覚える為必死にメモを取っている為心の籠らない相槌を打つ。

「最低でも早応大だろうな。そういえば霞詩子先生も推薦で受けるような話を聞いたな。」

早応大に合格し霞ヶ丘先輩と共に早応大生になる未来に思いを馳せながらこの日一日を終えたが帰り際に高尾さんから提案された。

「確実に入社したいなら今は早応大と言わずに国立の東田大学や西羽大学を目指してもいいと思うぞ。そこを目指せば最悪受からなくても早応大を楽にパス出来るようになると思うしな。バイトで忙しいと思うがそこを目指すくらいにならないとうちの仕事は勤まらなくなるかもしれないしな。バイトとしては充分なら本気で入社したいならな。」

物凄い目力で国内最高峰の大学への受験を打診されたのだった。

☆

「東田大学に西羽大学か……今となつては高校の成績も真ん中辺りにいる俺にそんな所目指せるくらいレベルアップできるのかな？」

弱気になりネガティブなイメージに襲われそうになったので頭を左右に何度か振りイメージを拭おうとする。

俺なら目指せる。同じ大学を通うよりも霞ヶ丘先輩を支える仕事をした方が将来どれだけ霞ヶ丘先輩と過ごせるかを思ったら絶対に後者だ。

職場の先輩の打診通りの進路を目指す為努力を開始する決意を固めて家路に着いた。

三章 霞ヶ丘詩羽の告白

高一冬休み。世間ではクリスマスで盛り上がっている中俺は一人で部屋に籠り勉強をしている。

日本トップに当たる東田大学や西羽大学に向けて勉強していた。

勿論勉強だけでなくたまに休憩がてらアニメを見る時間も作っているが見るアニメの量はかなり減らした。

不死川書店で広報のバイトをしている為同社の連載作品だけを追い掛ける。

豊ヶ崎学園は東京都にある進学校だが特段偏差値が高いという大学では無い。そこに通う俺は現在試験の順位は半分よりもやや低いくらい。

趣味のアニメを見る時間に多大な時間を費やしていた為学校の授業中に寝てしまう上家で勉強などあまりした事がなかった。

そこから日本トップの東田大学や西羽大学に通おうと思うとかなり無茶をしなくてはいけない。

今は趣味の時間を大幅に減らしてでも勉強時間の確保をしながら高一の授業の振り返りをしながら基礎を固めている。

勉強に熱中していたが肩が凝り集中力が切れてきた。台所へ行き水を飲んでゆっくりと深呼吸をする。

「東田大学……か。こんな所にいる俺がそこへ入る学力なんてついて行くか!」

国立東田大学に受かる為には5教科7科目必要になる為私立大学を受けるより勉強する範囲が圧倒的に多い。ここまでの出遅れを悔やみたくなるがまだ2年ある。

高3のこの時期までに学力を上げればいい。まだまだこれからだ、と思い頑張るしかない。

霞ヶ丘先輩の所属する不死川書店を目指して今は頑張るしかない。

そう考えポジティブシンキングしながら部屋に戻り勉強を再開する。

気が付いたら日付を変えてから時間が1時間も経っていた。

そろそろ寝るか。そう思って机から立つと着信が鳴りスマホに霞ヶ丘先輩からの着信を伝える。

出てみるとすかさず霞ヶ丘先輩は応答した。

「あら、この時間でまだ起きてたの。アニメランニングかしら?」

「いえ、勉強していたらこの時間になっていました。そろそろ寝ようかと思ってたところです。」

「勉強? 珍しいわね。安芸君からその言葉を聞く日が来るとは思わなかったわ。一体ど

ういう風の吹き回しかしら?」

本当に驚いた、というような声音で霞ヶ丘先輩は驚いていた。

「不死川書店の先輩に東田大学や西羽大学に進んだ方がうちに入りやすい。つて言われまして。」

「東田大学!? またそれはどういう風の吹き回しかしら? あなたがそんな大学に入りたいなんて言うようになったのね。」

「目指すだけなら誰にでもできると思いますよ? 実際に入れるかはさておき。まあ、この前初めて模試を受けてみたんですけどE判定だったんでまだ記念受験に近いですけどね。」

「あら、まだ安芸君は高一なんだから何とかなるわよ。何か悩みはあるかしら?」

「そうですね。バイトをしているから塾とか予備校に通う時間しか無いんですね。学校の授業と自主学習だけで足りるでしょうか?」

「なるほどねえ。確かに東田大学入る人は予備校通ってる人が多いんですけど……」

暫くの沈黙。俺は口を開こうとしたら霞ヶ丘先輩から思わぬ提案を頂いた。

「私が勉強を教えようか? 毎日は無理だけど土日くらいなら教えてあげるわ。…あ、オンラインでいいなら平日の夜でも教えられるわ。どう?」

「え!?それって先輩の執筆活動の邪魔にならないですか!?土日毎週会えるなんて嬉しい提案ですけど。」

「問題ないわ。私だってまだ高校生なんだから執筆活動しながら勉強してるわ。その時間をちよつと割くだけよ。それに教えるのも勉強になるしちよつどいい復習になるわ。」

「それじゃ、明日から早速オンラインでお願いしてもらってもいいですか!?」

俺は勢い込んで霞ヶ丘先輩の提案にのつた。

「必ず不死川書店に入社して先輩の作品を売上を上げる手助けをできるように頑張ります!」

今の目標を伝える。

すると多少の沈黙があり霞ヶ丘先輩から「そう。頑張りなさい。」

と言われた。

先輩が応援してくれてるしもつと頑張ろう!!と決意し床についた。

☆

ビックリしたわ。

まだ鼓動が高鳴っているのが自分でも分かる。

私の一人目と言えるようなファンで同じ高校の後輩だった安芸君に『私の為に』って

言つて貰えるなんて。

それにしても、明日から早速リモートで勉強を教える事になった。

「毎日通話出来るし会えるつて事よね。」

そう呟くと毎日安芸君と通話できる事を想像して顔が赤くなつていくのが分かる。

冷静になりなさい。安芸君にこんな姿見せれないわ。

最初は『妙な後輩がいるな。』その程度の気持ちだった。

だけど高校でバイトをする為教師に粘り食い下がる彼を見て私は執筆活動の励みにしていた。

その彼がなんと次は図書室に私の連載作品を図書室に置く為に今度は食い下がっていたのだ。

そして初めて行われた握手会では朝から列の最前線で待つていてくれた。

最初は感謝を伝える為にライン交換しただけだった。

だけど話をする度、連絡を取り合う度に彼の存在は大きくなっていく。

私は勿論作品を読んでくれていたたくさんの方の為にという思いがあるが『彼の為に』という思いが強い。そして彼からも『私の為に』と言つてくれた。

「よしー」声を出しより一層執筆に熱が入るのだった。

☆☆☆

「あー、成程。そこをそうするといいいんですね。」

翌日からパソコンでSkippで霞ヶ丘先輩に通話をして分からないところは聞きながら勉強を教えなってもらっている。

「それじゃ教えたところを意識しながら練習問題解いてみて。」

霞ヶ丘先輩に教えてもらいながら勉強していると進みや理解が捗るな、と思いながら黙々と練習問題を解いていく。

霞ヶ丘先輩の方からはカタカタとパソコンのキーボードを打っている音が聞こえてくる。

先輩も執筆活動しながらも俺に勉強を教えてくれてる、その事実により集中しながら練習問題を解いていく。

暫くして問題を解き終え一通り見直し終わると「終わりました。」と伝えると先輩と答え合わせをしていった。

「正解。正解…」練習問題の採点が終わると間違った所の復習として説明をしてくれる。「理解が早いわね。地頭はいいみたいね。」

間違った問題の説明を終えると褒められたのでビックリしながらも嬉しさが込み上

げてくる。

「ありがとうございます！でもまだまだです。それにしても執筆活動をしてるのにこんなに勉強できるなんて凄いですね！」

「朝から夜までずつと執筆している訳じゃないわ。それに、作家というのは連載が無いとただのニートよ。学歴があればいざという時何とかなるかもしれないでしょ？」

「そうなんですか。にしても凄いですね。先輩は早応大学を目指してるんですよね？」

「あら、そんな事誰に聞いたのかしら。安芸君のエッチ。」

擲揄いながらそう言われた。俺は誤解を招いてしまったと思い慌てて反論する。

「いえいえ、不死川書店で風の噂を聞いただけですよ。エッチなんてそんな」

「冗談よ。そうね。早応大学に行く事になりそうかしら。」

☆

「今日はここまでにしましょうか。」

「はい！ありがとうございます！」

「明日池袋に待ち合わせましょうか。」

明日は土曜日なので会って教えて貰いながら勉強を教えて貰う日になっている。

「池袋ですね。分かりました。」

「最初に書店に寄っていいかしら？」

「大丈夫ですけど。書店？本でも買うんですか？」

「ええ。読書は必要よ？集中力上がるしね。それに安芸君に問題集とか参考書勧めたいしね。」

「俺の為に？ありがとうございます！」

「目標に向けて安芸君が頑張ってるし少しでも良いのを選びたいじゃない？」

「ありがとうございます！それじゃ明日池袋で。」

「ええ。じゃ、お休みなさい。」

「お休みなさい。」

通話を切ると信じられない気持ちが大きかった。明日池袋で会う。これってデートじゃ？

明日を思うと興奮で暫く眠れなかった。

☆☆☆

どうしよう。昨日の夜何を着ていくか決めたのにいざ朝着てみるとなんとなく違う気がする。

私服で会う機会は何度かあったけど2人で会うのはほぼ始めて。どうしようか？

気取り過ぎるのは良くないだろうか。

自然な格好にしようかな。こっち着た方が印象いいだろうか。

町田さんに相談してみようか。

やはり自分で決めるべきだろうか。

アレコレ悩んでいたらあつという間に待ち合わせ時間に合わない時間になってしまった。

遅刻の連絡をしなければ。なんで着ていく服でこんなに悩んでいるんだろうか。

これではまるで恋する乙女じゃないか。

☆

「あ、霞ヶ丘先輩どうしたんですか？」

そろそろ待ち合わせ時間に間に合わなくなると思ったので勉強道具を纏めて出発の準備していたら霞ヶ丘先輩から着信が鳴った。

「ゴメンなさい。準備に時間かかるから30分程遅れると思うわ。忙しいのにゴメンなさい。」

霞ヶ丘先輩に本当に申し訳なさそうに謝られたので慌てる。

「いえいえ。女の人のの方が準備に時間かかるとすからゆっくり準備してきてください。慌てなくて大丈夫ですから謝らないでください。」

俺も遅れないように急ぎ目に準備して待ち合わせの池袋へ向かう。

憧れの霞ヶ丘先輩と池袋で会える。こんな嬉しいことは無い。今日という日が終わらなければいいのに。

でもいざ会う時間が近付くと緊張する。

駅に向かう道程がいつもより遠く感じる。

☆

なんだかんだ待ち合わせ時間ピツタシに着いてしまったので駅ナカのコーヒーショップでコーヒーを飲みながら本を読みつつ待つ。

霞ヶ丘先輩から『そろそろ到着する。』という連絡をもらってコーヒーショップを出て待ち合わせ場所に再度向かう。

待ち合わせ場所で会った霞ヶ丘先輩は制服で会っていた普段とは違い今日は私服。じっくり考えてくれたであろう私服は意外にもふんわりしていて普段知的なイメージの先輩とのギャップがいい。

「先輩、私服似合ってますね。可愛いですよ。」

思わず褒めると霞ヶ丘先輩は顔を真っ赤に染めて俺まで顔を真っ赤に染めてはさすがってしまった。

それから書店に行き霞ヶ丘先輩がチョイスしてくれた問題集や参考書、現文を解くの

に役立ちそうな小説を選んでくれそれらを買う。

かなり重くなってしまったので一旦駅のコインロッカーに預けて喫茶店に入り勉強をする。

教えて貰いながら俺が問題を解いている間に先輩が執筆活動をしていくスタイルは昨日Skipで行ったリモートでの勉強会と一緒にだったが面と向かって会ってるのは効率が違う。

しばらくしてから休憩がてら甘めのカフェオレを飲みながら霞ヶ丘先輩に話しかける。

「そういえば今日は忙しいところありがとうございます。会って勉強会するのはリモートよりなんかいいですね！こう、言葉では言い表せないですけど。」

曖昧に言葉を濁らせながらも楽しさを伝えると先輩も分かってくれたようで嬉しそうに反応を示してくれる。

「そうね。安芸君とこうして会っていると私もいつもより集中できているし。それに、こうしていると恋人同士みたいだしね。」

霞ヶ丘先輩が何か照れながら小声で話していたがタイミングがいいのか悪いのか俺は慌ててカフェオレを飲んでむせてしまった為聞き逃してしまった。

「ゲフンゲフン。すいません。霞ヶ丘先輩ちよつとむせてしまいました。えつとなんて

「？」

聞き返したがそっぽを向いて誤魔化されてしまった。「漫画やラノベの難聴主人公じゃないんだから。」と小言を言われ返す言葉がなかった。

☆☆☆

楽しい時間はあつという間に過ぎてしまった。

今日はこれでお別れという事で喫茶店を出て駅に向かった。

だけど何となく会った時に『可愛い』って言われてときめいたり。

何度か会ったことはあつたが完全にプライベートで会ったのは今日が初めてという事だったり。

お互いが口にはしなかったが『初デート』という認識を持っていたり。

そんな色々な気持ち巡回途中の公園で先を行く彼の手を掴み引き止めてしまった。

「待つて。」このまま帰したくない。このまま帰したらもしかしたらもうこの関係が続かないような。そんな気がして思わず引き留めてしまった。

不思議な顔で安芸君は私を見つめる。

何か、何かを伝えなきや。じつと安芸君の目を見つめる。

言葉が緊張なのか、フラれるかもしれない恐怖なのか分からない。でも何故か声が出ない。

それでも声を出す。小説やアニメみたい綺麗じゃなくてもいい。私の気持ちを彼に伝えたい。心からそう思った。

「行かないで。安芸君、いえ倫也君。私、貴方に伝えたい事があるの。」

鼓動が早い。心臓があまりに早く動くもんだから胸から飛び出していきそうな、そんな勢いを感じる。

「貴方が好きなの。好きな事に一生懸命で。真っ直ぐ私に向けるその視線と熱意で私をいっただって見てくれてる。」

倫也君は驚いた目で私の目を見つめる。

その顔に驚きはあるがシヨックな顔では無さそうだ。

「だから、次会う時は私の彼氏として会って欲しいの。」

握った手を離されることは無かった。

一大決心で言った私の告白を聞いて倫也君は繋いだ私の手を引き寄せハグされた。

そして優しく見つめられ、私はそっと目を閉じる。

確か彼は彼女なんて出来たことないし童貞だろうと思う。

ただどこも言葉は必要ない。優しい彼の唇がそっと私の唇に合わさった。



四章 幼馴染との不意の再開はフラグ

私はEGGOSTIC—LILYという同士サークルで柏木エリとして同人活動をしている。活動のメインはその時有名なアニメの二次創作、主に凌辱系のイラストを描いている。

描いている絵が18禁だし昔学校でヲタバレしてトラブルがあつたので今は基本的にヲタクということを隠して学校生活を送っている。

表向きには美術部として活動しているが第二美術準備室を私物化している。そこでは趣味の絵を描いたりしている。

普段は美術部のエースとしてコンテストに出す絵などを描いている。表の顔を意識して学校の友達とは接している。表の顔は丁寧な言葉遣いで上品な趣味と会話を。

秋にかつて学校でヲタバレして絶縁した幼馴染の安芸倫也と高校になって多少の復縁をしたのだがその安芸倫也が紹介してくれた友達の上郷喜郷と仲良くなり今は第二美術準備室で2人で今期のアニメ事情に関して談義している。

このアニメが今期の覇権アニメかな?という事でラフスケッチを描いている。

「おー!上手い!!まさか生で柏木エリ先生の絵を描いてるところを見れるとは!」

「私の事はえりりでいいわ。あまり学校でその名前を出してくれると嬉しいわ。」

「ああ、ゴメン。嬉しくてつい。」

「ずっと読んでくれてただっけ？私の本。それは嬉しいけど。まさかこの学校に倫也意外にもファンがいたとは。」

意外、と感じる。描いてる作品が18禁だし年頃の男子には刺さるのかもしれないが。18禁という特性上高校で話題に上がる事が少ないからファンを認識しづらい。

即売会で顔を合わせるか、元からの知り合いかでもない限り難しいだろう。

「安芸には感謝しないとな。あ、またバイト欲しい時は言ってくれ！安芸はどうやら忙しくてもう手伝いは難しい、って言ってたから。」

冬コミ前に安芸倫也の手が借りれなかった為に彼の紹介で知り合った上郷喜彦に手伝ってもらったのだ。

「あー、そうなんだ。じゃ、またお願いしようかしら。委託販売で新しく販売する分の原稿を今描いてるところだから今日からさっそく頼んでもいいかしら。」

「おう！まかせろ！今日からか！1回家帰ってもいいか？」

「勿論よ。突然頼んだんだし。終電までに来てくれると嬉しいわ。」

「分かった。そうするよ。」

☆

「このコマのベタお願い。」

「オツケ。あとこれ、さつき頼まれたところ。ベタ塗れたから確認お願い。」
「描けたのはそこに並べておいて。後で確認する。」

深夜澤村スペンサー英梨々邸にて同士活動が行われている。

18禁のイラストを描いているその手伝いだがイヤらしさは一切無い。

最初に手伝いに行った時はほんのちよつとだけ、そういう下心が無いことも無かったが。

今は昔の学校のジャージであろうラフな服に身を包みひたすらに原稿を描く柏木先生の怒涛の指示に応えるのみである。

「よっしー、このベタ塗り次宜しく。」

「はい来た。」

任せてもらえるのは今の所ベタ塗りだけなので指定された箇所を黒く塗りつぶしていく。

最初はベタも苦勞していたが段々と慣れてきた。

「塗れたからここに置いとく。」

指定のコマのベタ塗りを終え並べておいてくれと言われた箇所には原稿を並べる。

「もう塗れたの!?早くなったわね。よっしーは絵を描く才能あるんじゃない?」

「いやいや。俺に絵を描く才能なんて。」

「よっしーが描く機会があつたら私が手伝うわ。」

「機会があれば頼む。えつとよっしーは決定でいいのか？呼び方。」

「ダメだったかしら？フルネームとかより呼びやすいからいいかな？と思つたけど。」

「全然。これからもよっしーと呼んでくれ。」

あだ名がついた。何となく近づけた気がする。

ラフな格好をしているがえりりは学園の二大女神と呼ばれるくらいの学校きつての可愛さと美しさを持つてる人だ。

通常なら話しかけることすら恐れ多い人である。

その人からあだ名で呼んでももらえるなんて是非もない。

全校の男子生徒から羨まれる事間違いなしな事である。

「俺はえりり、って呼んでいいか？」

思い切つて下の名前前で呼びたい、そう伝える。この許しが出たらもしかしたら学校では背中に気をつけた方がいいのかもしれない。

「いいわ。これだけ手伝ってもらつてるんだし。その呼び方で。」

何の取り柄も無い俺だが安芸倫也と友達になれて良かったと心底思った。まさか澤村スペンサー英梨々とこんなにも仲良くなれるとは。

「あまり学校で仲良くしてるとこ見られたくないし話がしたい時は第二美術準備室か家に来てくれると嬉しいわ。」

「分かった！そうするよ。その時はまた連絡する。」

「ありがとう。理解してくれて嬉しいわ。これをネタに脅されてもおかしくないのに。受け入れてくれてありがとう。」

「それはえりりの同人のように？」

「えっと、そういう事ね。そういう妄想が好きでこんな作品を書き出したんだし。この方が売れるから、というのものもあるけど。趣味じやなきやここまで描けないわ……」

心做しかえりりはそう言い顔を赤くしながら俯いている。

「えっと、それなら遠慮なく。」

俺はえりりの言葉にのった。

まだ夜は長い。

☆☆☆

春休みはあつという間に過ぎていった。

流れとは言えよつしーと仲良くなり今後の同人を描く上での研究を重ねることがで

きた。

毎日のように家に来てもらってたのによっしーは疲れ知らずのような体力をみせて私も満足した。

そんな春休みを終え迎える新学期。私達は2年生になりクラス替えが行われる。

私はG組。よっしーはB組。倫也もB組だった。

「同じクラスじゃ無くても？家で会えるし！美術準備室でも会えるし。」

誰に言うでもなく1人愚痴るのだった。

☆

「よー！安芸！今年も同じクラスだな。宜しく頼むぜ。」

俺は今年も自身をオタクに押し上げた師匠の安芸倫也と同じクラスになった。

「宜しく。上郷。最近どうよ？」

「ぼちぼちかな。3月の模試も判定はイマイチだったけど点数は上がってるから徐々に手応え掴めてきたかな！」

「おいおい。模試?!まさか安芸の口から勉強の話が出てくるとは。アニメの話が出ない安芸は安芸なのか!？」

「最近勉強しかしてないから。チエツクはしてるけど語れるほどアニメは見れてないな。因みにオススメは？」

「まさか俺が安芸にアニメを教えることになるうとは！今期の覇権アニメはな…」
休み時間は今期のアニメの話をした。安芸が勉強とは。

どういう心境の変化だったのだろうか。

☆

新学期が始まってしばらくした日の授業前。隣の席の女の子から声を掛けられる。

「あの、安芸君。次の授業だけど教科書見せて貰ってもいいかな？」

唐突にこれまで特に交流があつた訳じやない隣の席の子に突然話し掛けられてビツクリした。

「いいけど。なんで名前!？」驚いて名前を知ってる理由を聞いてしまった。

「去年は隣のクラスだったけど。色々有名だったから名前を知ってただけだよ。突然

ゴメンね。」

語尾を伸ばし気怠そうな感じで謝られる。

謝られた気はしれないが俺の名前、ってこんな名も知らぬ隣のクラスの女子にも轟いていたのか、と気恥ずかしくなる。

「えっと、君の名前は？」

俺の名前を知ってる事は聞けたが肝心の女の子の名前を聞けなかつたので名前を聞く。4月だし名前を聞くのはそんなに不自然では無いだろう。

「あー、私の名前教えてなかったね。私は加藤恵と言います。宜しくね安芸君。」
「宜しく。えっと、机くつつける?」

「ありがとう。それじゃあ。」

この次の授業では席をくつつけ同じ教科書を見ながら受けた。

☆

「凄いね安芸君は。ノート凄い書いてた気がするけど。」

「ああ、色々だね。勉強が遅れるから覚えたい事とか理解できなかつたとこメモっておいて後からの復習にも役立つるし。気になった事はノートとつてる感じ。」

「ふーん。なんか大変そうだけど勉強頑張つてね。」

加藤恵は「凄いね。」と言ったが本当に『凄いね』と思っているか感じられないような感情が籠っているのか曖昧な相槌だった。

こういう子もクラスにいるんだな、というのが最初の印象だった。クラスの女子同士で休み時間は話しているし恋バナもそこそこしている感じリア充かな、という印象。

俺とは遠い位置に存在するのかもしれない。

春休みに霞ヶ丘先輩と付き合いだしたことはここでは置いておくものとする。

☆

「学校の近くにこんな喫茶店あるんだね。」

「私も初めて来たわ。昼休みにしか会えないのは余りに寂しいし。まだそこまで部活忙しくないし。たまにはこういうところでゆっくりしたいじゃない。」

「いいと思うよ。えりりのサークルは次いつが忙しい？」

「私のサークルはまた委託の販売の為に描いてるから。次は夏コミかな。夏前はまたよっしーに手伝ってもらわよ！」

任せとけと相槌を打ちコーヒーをぐくり。

「それまでにじっくり研究しないとな！」

「そうね。よっしーには頑張ってもらわないと。」

お互いに同士の為の研究を考えて顔を赤くしてた気がする。

その後はえりりの愚痴を聞いたりして今日のところは解散かな？などと考えてると。

キヤツキヤウフフしながら男女が2人喫茶店に入ってきた。

1人は俺達を通っている豊ヶ崎学園の制服を来てる女子高生だ。

男の方は少し年上に見える気がする。

「あの2人ってカップルかな？」

「さつき入って来た2人？」えりりが顔を寄せて小声で囁く。

「年の差ありそうだから援交かもね。」

俺はいきなりの囁きに驚きながら。

「ウチの学校の学生が!？」

「案外やってるもんよ。女の子は色々とお金が掛かるのよ。ウチの学校はほら。バイトも禁止だし。」

「そんなもんか?」

「そういうものよ。あの2人がそうなら面白いじゃない? あ、今年の夏の同人のネタ思いついた。」

援交が実際にあるのかは分からないが空想のネタとしては面白いのかもしれない。

☆

クシユン。くしやみをしてしまったらすかさず従兄の圭一君に「あ、誰かが噂してるかも?」と冗談を言いながら笑ってる。

「もう。誰が用事ある、って呼び出したの? 用がないなら私帰るけど?」ちよつとわざとらしく頬を膨らませてみる。

「ゴメンゴメン。」

「で、用事って何? 私も今日から学校始まったから忙しいんだけどなく。」

「実はこの前友達と話した時俺が従妹いる、って話になつてな。」

「大学の友達と? それで?」

「俺ら皆彼女出来たことない奴で集まってるから『女の子と話してみたいな』って話に

なつてな。恵のこの友達とか呼んで食事会とかどう?」

「食事か?」「勿論俺達の奢りで。どう?」

「うーん…友達に聞いてみる。」

「ありがとう。できればでいいからさ。」

「期待はしないで待つててよ。」

そんな感じで従兄の圭一君と食事会の打ち合わせをしてこの日は解散した。

☆

去年秋からバイトしだしてもうそろそろ半年。もう慣れたものである。学校終わりに出勤し2〜3時間自分のデスクに座りパソコンで来年に放送する予定になっている不死川書店原作のアニメが決定ホームページの作成を行っている。

バイトの俺は手伝い程度の物だが、『ここはこうした方がいいのでは』というアイデアを出しながらも多少htmlを打っている。

この日の退勤時間が来てしまったので退勤時間をタイムカードのシステムに打ち退勤の挨拶をしてオフィスを出る。

ちようど出た所で霞ヶ丘先輩から電話が来たので出る。

「霞ヶ丘先輩、今オフィス出たところなのでもう少し待つて貰えますか?」

「もうオフィス出たならちよつと待つてもらっていい?私も今日編集部で打ち合わせ

だったのよ。」

「そうだったんですか!? それなら言ってくれば良かったのに。分かりました。待ってますよ。」

暫く不死川書店のオフィス前で待っていると霞ヶ丘先輩が出てきた。

「先輩。打ち合わせお疲れ様です。」

「倫也君、待っててくれてありがとうございます。」

「いえいえ。遅くまでお疲れ様です。」

「ありがとうございます。これから帰って勉強? 倫也君も大変ね。」

「いえいえ。これから執筆活動の詩羽先輩程じゃないですよ。」

「あら、初めて名前と呼んでくれたわね。ありがとう。」

クールに返しているけれど顔を多少顔を赤らめているのが街灯の暗い中でも多少伝わってきた。

「いえいえ。付き合っているのいつまでも苗字つても変だとずっと思ってた。」

「付き合ってるのに『先輩』って敬称ついてるのも何とかして欲しいわね。」

「勘弁してくださいよ。詩羽先輩。ようやく名前呼び出したとこなのに。」

「呼んでくれる日を楽しみにしてるわ。」

「それじゃ、また後でリモートで。」

「ええ、また後で。」

乗る地下鉄が別れるので駅で別れ地下鉄に揺られ家に帰ってきた。

詩羽先輩が家に着いて準備を終えて連絡が来たので今日もSKIPを繋いでリモート勉強会を行ったのだった。

☆☆☆

ゴールデンウィークを控えた最後の登校日。学校は何となく浮っている。

やれ旅行だの遊びだの皆楽しそうに連休の予定を話している。俺も詩羽先輩と会って勉強会をしながら過ごすゴールデンウィークを思い浮かべながら連休前の最終日を過ごしていた。

以前授業で教科書を忘れて教科書を見せた事のある隣の席にいる加藤恵が女友達何人かで話しているのが耳に入った。

「明日から休みだからさ。明日の夜に従兄とその大学の友達と会って食事ってかんじなんだけどどうかな?」

「私はいいよ!大学生でしかも医大の人達とか絶対将来有望じゃん!」

「明日の夜だよね、私もいいよ。将来とかは分かんないけど頭良さそうなのは確かよね。」

「従兄も城北医大の4年って言うてたかな？だから医者になるには時間がかかるって言うてたよ。」

どうやら明日大学生の人達と食事会という所か。教科書見せた時は礼儀正しい感じがしたけど結構遊んでる子なのかな？席はたまたま隣だけど交流無いからなく。結構遊んでる子なのか!?まあ、遊んでる子が学校で礼儀正しくても別に違和感は無いのだが。

俺の中のリア充イメージが学校ではあまり礼儀正しくしていかないだけで。固定観念で人のイメージを決めるのは良くないかもしれない。

だけど見ず知らずの人を含めて会う感じが合コンのイメージが抜けない。どうしても合コンに集うウェイ系のパリピ学生と一緒に盛上がる女子高生達をイメージしてしまった。

☆

「今日の勉強会はここまでにしましょうか。」

「そうですね。今日は休んで明日に備えますね。明日は池袋のいつものカフェで大丈夫

ですか?」

「そうね。明日は10時にいつものカフェで。休みだから会って勉強会できるわね。私に会えるの嬉しい?」

「そりゃ勿論。詩羽先輩に会えるの楽しみですよ!」

「私もよ。それじゃまた明日ね。」

今日も学校終わりのバイトを終えて家に帰り詩羽先輩とオンラインで繋ぎながら勉強会をしていた。勉強会を3時間で終えてSk i pの通話画面を切りヘッドセットを外す。

勉強会を始めてから会って勉強会をしている日以外はこうしてSk i pで顔を見ながらるのが恒例になっている。

遠距離恋愛という程の距離ではないがお互い忙しい身で同じ学校なのに毎日は会えないのでこういう顔を見ながら話せるのは有り難い。

付き合ってから5ヶ月経ってこうして毎日交流を持ってるのが嬉しい。とはいえ明日会えるのを楽しみにして床についた。

☆

「はあく。」従兄の恵一君に誘われて参加した食事会の帰りだけど溜息しか出ない。

ドラマやら何やらやクラスの女子達が『今日はハズレだわ』なんて話している様子

を見た事や聞いた事があるが今日のはハズレだったのだろう。私かすれば何だかなうという感じだった。

学校で誘った友達達はちやつかりお持ち帰りされたようのでいつの間にか食事会から気付いたら居なくなつて何となく残された私達は解散になった。

「じゃ、俺達も。」と誘われもしたがお断りして今駅へ向かつて帰るところ。

ちよつと気になつてゐるケーキ屋さんへ寄つてみよう。よし！と一人で気合いを入れてやけ食いでもしてみようかと拳を小さく握つてみる。

ちよつとそんな時正面から歩いてきた人が私に声を掛けてきた。

「あれ？ひよつとして恵ちゃん？」

「え？」道端だし誰かに声をかけられると思つていなかったので驚いてしまう。よくよく顔を見てみると昔よく遊んでいた近くに住んでたと何となく思い出す。

「え〜！久し振りじゃん!!まさかこんなところで会えるなんて思わなかつたよ〜。」嬉しそうに話し掛けてくるからさつきまでのモヤモヤが吹き飛んでしまう。

「親の転勤で引越したんじゃないやなかつたけ？どうしたの〜!!?ゴールデンウィークだから遊びに？」

小さい頃の記憶をなんとか引つ張り出して湧き出た疑問をそのままぶつけてみる。そう。昔は近所だったから遊んでいたが小学校に入学する前に親の転勤で北海道に

引っ越したはず。

「そうだよ。実家は北海道。こっちの高校に入学して寮で暮らしてるんだ。」

「え!?折角のゴールデンウィークなのに実家に帰らないの?というか高校生で寮生活なんて運くん凄いいね。」会話しながら何とか蓮という名前を思い出してさり気なく使ってみた。

「あはは。親に連絡したら忙しいだろうし帰ってこなくていいぞ、って帰省は断られちゃった。まあ学校休みでも予備校とかあるし断られなくてもこっちにいるつもりだったけど。」

「凄いな。休みの日でも勉強するんだ。私が同じ立場なら絶対実家に帰ってたかも。」

良かった。運くんであってた。遊んでたのが何せ小学校に入る前だったから記憶が曖昧だったから自信は無かったけど。

会話も自然に続いてるし今更名前間違つてるとか無いはず。

「あー、ま。普通ならそうかもね。予備校通うのは出会い求めてって人も結構いるけど。うち男子校だから。無料で通えるところも結構あるんだよね。」

「え!?!無料って凄いいね?って出会い求めて予備校行ってるって…予備校って出会いあるの??」

当然の疑問だ。勉強しに通うところ、ってイメージしかない。そこで知り合ったどうこうってイメージが全然無い。

「男子校に通ってるだけなやつよりはあるんじゃないの？知らんけど。」笑いながら答えられた。馬鹿にされた感のある答え方されたけど。

「あ、立ち話もなんだしどつか店入ろうか？」とちようど道の反対側にあるコーヒーショップを指差す蓮くん。

「だね。そうしよつか。」

従兄に誘われた食事はハズレだった事に感謝し久し振りに再開した蓮くんとの会話を思いつきり楽しんでやる。

☆

「え。蓮くん蓮見高校通ってるの!？」

蓮見高校は都内随一の中高一貫の進学校だ。確か東田大学の進学率が日本で1番高いことが多くて有名な高校だ。昔よく遊んでた幼馴染がそんな所に通ってるなんて驚きだ。

「そうなんだよね。早く親元離れたくて頑張っちゃった。」笑いながらそう答えるが反抗期とも取れる台詞だか反抗期とは違う雰囲気を感じる。

「それにしても蓮くんが蓮見高校に通ってるの面白いね。そこに通う為に付けられた名

前みたい。」

「それは偶然だと思うけどね。さすがに。親が先輩な訳じゃないし。読み違うし。」

「親が蓮見高校の卒業生なら“れん”じゃなくて“はす”って名前だったかもね。」

「いやいや、名前ではすってなんか変じゃない！」苦笑いしながら軽く手を肩を叩く蓮くん。軽く夫婦漫才みたい、と思って不意にキyunとしてしまった。

「ははっ。どうしたん？そんな顔赤くして。もしかしてボケじゃなくてホントにそうだと思っただ？」

更に顔が赤くなるのが分かる。もう、何でそんな事言うの。昔は異性を意識せず遊んでいた幼馴染が久し振りに会ったらすっごいタイプな感じに成長していてドキドキしているやつだ。

「もう。これは違うやつだよ。」

「え？マジで？」蓮くんは嬉しそうに顔を輝かせる。

「あ、でもクラスの男子がこの前話してたけど幼馴染って恋愛で勝てないこと多いらしいよ。」クラスで今年たまたま隣の席になってその人が友達と話していたのが偶然聞こえたアニメの話してみる。

☆☆☆

精一杯の照れ隠し。勝てないって言ってたけど、これは勝てるかもしれないとドキドキが更に高まってしまいまともに会話できた記憶が残って無くて。

気付いたら自分の部屋のベッドに横たわってたけどスマホに入っている蓮くんの連絡先を見つめニヤニヤしてしまう。

そして何となく何も無いのにラインをしてしまう。特に意味は無いけどチャットを送っては帰ってくるまでのドキドキを楽しむのだった。

五章 恋愛相談からの口説き文句

「あつという間にゴールデンウィーク最終日ね。」

Skipで通話をしながら勉強を教えて貰っている詩羽さんに連休最終日であることを告げられる。

「また明日から毎日会えなくなると寂しいですね。」

「そうね。だからこそ今日は終電ギリギリまで倫也君エキスを頂いたわけだけど。」

「すいません。エキスとか言われたら卑猥な感じになるのでもう少し表現を和らげて貰えないですか?」

「あら純情な倫也君には刺激が強すぎたわね。こういう場合は朝チュンと言うべきだけど夜じゃなかったし…夕チュン?」

「…それももしかしたら回り回って直接的な表現かもしれないね。」

相変わらずの霞ヶ丘詩羽節で話をしてくる。一応俺は勉強中で彼女は全年齢向けのライトノベルを執筆しているはずなのだ。

「あ、そういうえば詩羽さんって来週の日曜日は暇ですか?」

「あら、突然どうしたのかしら? 予定なら休日には勉強会という事だったけど。浮気相手

と逢い引きしたいから用事を作って、と言うことかしら？」

「そうじゃないですよ。俺が浮気なんてする訳無いじゃないですか。従姉妹が久し振りに家に来るんで詩羽先輩を紹介したいんですけど。」

「従姉妹に紹介？それってご両親にも会うかもしれないわね。心の準備が…」

「あ、親はその日居ないのでそこは大丈夫です。」

「都合よく居ないのね。でも従姉妹にはなんて紹介するつもり？」

「え、普通に彼女です、と。昔からヲタクだから彼女出来ないんだ、とマウント取られてた割に従姉妹にはずっと彼氏居たことないんでマウント取り返せるチャンスだと思つて。」

「あら倫也君の仕返しに利用されるのね。それならいよいよ私をいい加減呼び捨てにしなさい、ね。倫也。」

急に呼び捨てにされ顔が赤くなる。鼓動がより早くなるが意を決して口を開く。

「そうだね。う、詩羽。これから呼び捨てにさせてもらうよ。」

「遅すぎたくらいだけど。ふふ、倫也も男なのね。体を許した相手には呼び捨てにできらう。」

「体を許したのは俺ですか!?!逆になるのかと思うけど!?!そこはまあいいや。」

会話上続けると更に過激になってしまう事を察知して何とか流そうと努力する。

この会話、ギリギリじゃないか!?

「あゝ、動揺して公式が飛びました。詩羽、責任取つてよ。」

勉強しながらする会話じゃないのは事実なのでその責任の所在を明らかにする。

「試験で固くなつて公式を飛んでも同じ事を言うつもりかしら? どういう状況になつても飛ばないように何回も叩き込んでおきなさい。」

「無茶言わないでください。恥ずかしい事言つて揶揄うのは詩羽の得意技じゃん。耐性についても更に上回つた事言われるから慣れないよ。」

「そのうち慣れるわよ。そんなんじや来週の日曜日は更に恥ずかしい思いをすることになるわね。」

「従姉妹に何吹き込む気だよ詩羽。」

「あら、女子同士なら〃何処まで進んだか〃を話すのは定番よ。」

「そうなんですか。」

従姉妹の氷堂美智留に詩羽を紹介するか悩んだ。

悩んだだけで紹介はするが。

☆☆☆

明後日日曜日は母親命令もありいつものバンド練習を休み従兄弟の安芸倫也の家へお邪魔する事になっていた。

と、言うことでなんとかメンバーに許しを乞う前段階。

「つて事でゴメン皆！日曜日は練習に行けない。」

「そうだよね。赤点取ったら次こそ卒業が危ういもんね。」トキこと姫川時乃にニヤニヤされながら言われる。

「とか言つて従兄弟の彼としっぽりやるつもりだろ。このこの。」

エチカこと水原叡智佳には女子校で出会いが無い中で従兄弟でも男と会う事をイジられる。

「でもー日だけで大丈夫？テスト前スムーズに行けるように毎週休みとかになるんじゃない？」

ランコこと森丘蘭子には赤点回避が難しいんじゃないかと心配される。

「うーん…そこに関しては軽口で大丈夫、とは言えないんだよね。私勉強苦手だし。」

「試験2週間前からはどうせ休みだし分かんないところは私達も教えてあげるし頑張んな〜！今やミッチーがいてこそその icy tail なんだからここでいなくなるのは辞めてよ〜！」

許しを乞うどころか逆に発破をかけられてしまった。

☆

「やっぱりヲタクは隠れ蓑だったかー！トモにこんな美人な彼女がいるとはー！」

日曜日、トモの家に行ったところ彼女を紹介され悔しくてトモにチョークスリーパーを決めているとこだ。

トモの首にしつかりキメてトモは焦ってタツプをしている。

「あら、従姉妹にプロレス技をかけられて随分喜んでるじゃない。今度やる時は首絞めしてみる？」

「やる時!」彼女さんのその一言に色々想像して恥ずかしくなって思わず技を解いてしまう。

「技を解いてくれたのはいいけど初対面の人に言う事かな!」

「あら。首絞めは如何に変態な倫也でも興味無かつたかしら。」

「いやいや、明らかに詩羽の方が変態から出る発言でしょ！ねえミッチー。」

「私からしたら2人とも…やる事はヤってるんだね。そ…それより勉強教えてもらわないと。次赤点取つたらさすがに卒業がヤバいから。」

慌ててノートと教科書を出して勉強の準備をする。

「赤点回避程度なら難しくないでしょ。ね、倫也。」当然のようにトモの彼女の詩羽さんが言う。

赤点回避が簡単ならこっちは苦勞してないんだよ。

「まあ、美智留は昔から勉強苦手だったもんね。そこからだと確かにそこから高い壁だと思いかもね。」さすがトモ。従兄弟だから私の事を理解してくれてる。と、思いきや…。

「でも勉強なんてやるかやらないかの違いだから嫌い、って言うか苦手なのは単純にやってないだけだよ？ 学生の自分から逃げてるなら退学もやむ無しなんじゃ？」上げてから落とされた〜！ そうならない為に今日来たと言うのに。

「まあ、でも親に言われたし今日くらいは。でも後は自分で頑張つてよ？ 俺も暇じゃないんだから。」

「ありがとう。トモ〜。お礼に今度ライブ連れていくから〜。」

「いいって。ライブなんて。暇じゃないって言ったでしょ。」

「じゃあもし私達のバンドがライブデビューした時は来て！ 損はさせないから。」

どうしてもトモにライブの良さを分かって欲しい一心で食い下がる。

「その1日が貴重なんだよ。1日を無駄にする人は1日に泣く事になるんだから。」

頑なに断るトモになんとかライブの良さを分かって欲しい。

「そこを何とか。」

「1日くらいならいいんじゃない？ 今の倫也なら1日開けたって問題ないと思うわよ。」

それに、丸1日な訳では無いんでしょ？」

なんと彼女の詩羽さんからも助け舟を出してくれる。彼女の一言で揺れ動いてそう
だ。もう一押しで行ける。

「そうだよ。リフレッシュも大事だよ。」

「仕方ないなく。1日だけね。でもバイトもあるから土日のどっちかだけだよ。」やっ
た。遂にトモが折れてくれた。

いよいよバンドのライブデビューに向けて動く時だ。

「じゃあ、尚更美智留は勉強頑張らないとね。」

「くっ！受けて立つ！」

トモのお陰でこの日は勉強が捗った。

☆

「どうだった？従姉妹との初の対面は？」俺は突然彼女に従姉妹を紹介した印象を聞い
てみた。いきなり紹介したしドキドキしたけど。

「どうとは？どういった印象を聞きたいのかしら？法律で従姉妹とは結婚出来るもの
ねえ。倫也と従姉妹が浮気をする可能性が何%と思つたかという事？」

ニヤニヤしながら詩羽は聞いてくる。

「そんな事聞いてないですよ。単純にどう思ったか聞いたのに。」

苦笑しながら返す。ホントに付き合ってからもうこのように揶揄いが無くならないからドキマギが治まることは無さそうだ。俺の周りにいる女の人は一生彼女に浮気の危険性のある人として扱われていそうだ。

そして彼女にそう思われるという事はいつか創作のネタにするつもりなのかもしれない。

「そうね。いかにもな陽キャ代表格に感じたわ。私とは仲良くなれそうもなさそうね。」

「そうかな？ 案外仲良くなれそうな気もするけど。美智留も歌作ってるし創作者同士通じる物があると思うんだけど。」

「どうかしら？ 創作は創作でも分野が違うから何とも言えないわ。ところで彼女のライブ、行くつもり？」

「うーん。ライブハウスって俺と真逆な人が集う場所なイメージで行くの怖いんですよ。もし行く事になったらついてきてくれますか？」

恐る恐る聞いてみる。俺も真逆な場所だと思いが詩羽は更に正反対で合わない場所な気がする。

「それは勿論。倫也が1人でそんな場所に行ったらその場で知り合った女をお持ち帰りして浮気しそーだもの。」

当然のように俺が浮気する事が前提のように詩羽は俺を見つめて言う。いつものような冗談に見せて俺を試しているのだろうか？

「まさか。俺がそんな軽いヤツに見えますか？」

「あら違った？ 面白いえば昨日の夜私が倫也を『不倫理君』と呼んでた夢を見たのだけどそういう事かしら？」

「辞めてくださいよ！ そんな冗談！ 俺はそんな奴じゃ無いですよ。どんな夢見てるんですか……どこの世界線の話ですかね？」

やけに『不倫』の部分に力が込められているような気がしたけど全力で否定する。全く、なんて不吉なニックネームを。そんなニックネームで呼ばれている事を容認している人が居るのだろうか？ 居るならその人を見てみたい。

「冗談はさておきライブ行く事になったら教えてね。私がお代を出してあげる。」

「え？ 悪いですよ。俺の分くらい自分で出しますよ。というか無理矢理付き合わせるのに詩羽の分も俺が出しますよ。」

「いいのよ。普段の勉強会のお茶代という訳では無いんだし。稼いでる私にここは任せときなさい。」

「じゃ、それで。んじゃ、その後の何やかんやは俺が出しますから。」

「あら？ ライブ行った後に何をするつもりかしら？」

「軽い食事とかお茶とかするでしょ。変なこと想像しないでくださいよ。」

「じゃあその変なことを想像しておく事にするわね。」

全く、なんでいつも話しているところという方向に流れていくのだろうか。将来尻に敷かれられないようにするのは大変だ。いや、もう既にそのペースなのかも。

帰りに駅に詩羽を駅に見送りに行った時までそんな話をして今日のところは別れた。

☆☆☆

「と、言う事で私達もライブデビューする時かな、って思つて。」

試験前の放課後。私はバンドメンバーに宣誓した。

「私達ライブ出るつもりで練習して無かったから心の準備が。」私の提案に日和るトキ。「心の準備だけじゃなくてスタッフもないし本当に準備が足りないんじゃない。」確かにエチカの言う通り勢いで言っちゃったからその辺の準備はできてないかも、と思つてしまった。

「それじゃ、まずはスタッフをやってくれる人を探した方がいいかな？いきなりライブじゃ無くて。」

ライブデビューを少しでも遅らせたいのかせつかくのライブデビューを成功させた

いのか。取り敢えずはスタッフをやってくれる人を探す事になった。

「確かにライブ行ったらスタッフの子が物販やつてくれたりするかも。あ、でもメンバーがやっていたりもするから必ずしもスタッフがいなくても……」気付いたら3人とも教室の出口に向かっていた。

「じゃ、そういう事で。」

「赤点回避頑張つてねミッチー。」

「話の続きは試験終わってから。」

そそくさと3人は教室を出て行ってしまった。

仕方ない。まずは赤点回避が優先。勉強しよ。

家に帰るとどうしても勉強に集中できない私は試験前は放課後なるべく教室に残つて勉強する事にした。

☆

「あ、しまった。」今日の1限の授業の教科書を忘れてきてしまった。珍しく早起きしたからみっちり復習してから登校したらそのまま家に教科書を忘れてしまった。

隣の席に座っている加藤さんが1限の授業の教科書を取り出して机の上に準備を進めているのを見付けた。

「加藤さん。教科書見せてもらってもいいですか。」

俺は恐る恐る声をかけてみる。俺の顔をサツと見てどうぞ、と許しの返答を貰う。

なんかちよつと気まずい。前回教科書見せて以来でまだそんなに仲良く無いし仕方ないか、と思いつながらども。と短く返答を顔を見ずに返す。

頭を下げながら机を近付け教科書を見せてもらう。

授業が終わりありがとうと言い頭を下げながら礼をして机を元に戻す。

戻してる途中で加藤さんに声を掛けられる。

「あの、今度相談いいですか？」

「どうしたんですか？突然。」

「ちよつと色々。どうしたらいいのか迷つて。恋愛マスターの安芸さんに相談しようかと。」

「恋愛マスター!?何故に俺?!」

いきなり恋愛マスターと言われたもんで驚いてしまう。いつどこでなぜに恋愛マスターと呼ばれるようになったらう。いきなりで動揺を隠せない。

「機会があれば是非。」ありきたりの文句で断ろうと思つたら「じゃあ連絡先を。」と言われた。

うーん。女の人の連絡先を入れたら詩羽になんと言われるだろう。

ちよつと躊躇い考えてるとスツ、とスマホを出される。

「あ、じゃあちよつと。」流れでそのまま交換してしまう。良かったのだろうか。
「ありがとう。じゃあ今度。」ボソツと言われた。

いいや。いつその事詩羽にも同席してもらって相談にのってもらおう。そうしよう。

☆

後日詩羽を含めた3人での恋愛相談会が実現。

オンラインで3人の通話会議を行った。

「つて事で幼馴染と再開したらいい感じの雰囲気になって。」

現状報告を最初にされてからのこの感じ。成程。やはり俺はついていけないから詩

羽に任せよう。俺は聞き役に徹しよう。

「それで今度デートしようと思うんだけど。告白とかは待った方がいいのかな？」

お、いきなり告白とか？積極的だなく。加藤さんも陽キヤなのかな??

「告白は雰囲気によるからしたくなったらしいと思うわ。」

良かった。俺が何も言わずとも詩羽には伝わってるようで良かった。

「うくん。恋愛マスターの安芸さんはどう思います?」

と、思ったら主に振られてしまった。

「へえ? 倫也いつから恋愛マスターになったのかしら?」

やはりそこを突っ込まれた。どうしよう。

「俺も何でそう言われてるのか分かんない。それは加藤さんに聞いてくれ！」

「どうしてなの？加藤さん。」すかさず詩羽が加藤さんに聞いてくれる。

「えっと。教室で良く友達と恋愛談義してるから詳しいんだろうな、って。」

「それでか！確かに上郷喜郷と話していたからな。そういう事か。」

「あゝ、それで。でもそれって多分2次元限定だと思っただけから鵜呑みにしない方がいいと思っただけ。」

「そう？たまに聞いてると結構参考になるな、って部分も。男の人の意見聞けるの重要だし。参考程度に。」

遠回しに必要無いけど一応聞いておこう、という雰囲気が見え隠れしているのは気の所為だろうか？

心がザワつく辺り気の所為ではない気がするのだが。

「だって。良かったわね。恋愛マスター。」詩羽まで揶揄い口調で言ってくる。なんかこれって、何だかなくって感じだよ！

「それで？男なら告白したいもんなの？」詩羽にまで回答を急かされる。女の人からの相談に意見するのは爆弾入りの箱に手をつ突つ込むような物の気がして意見を答えるのが気がしていたのだが急かされているのなら仕方ない。何かあつたら後で2人の通話に戻った時に詩羽に慰めてもらおう！

「幼馴染って関係なら異性って意識が無いだろうから女の子の方から告白されないとずっと気付かないままな気がするな。俺は。」

「へえ。それは実体験からの意見かしら？まるで幼馴染に未練でもありそうな気がするけど？」直ぐに詩羽が尋ねてくる。刺がある言い方に場が一瞬凍り付いたような気がする。

「実体験というか、アニメ見たりゲームしたりしての感想というか。俺も幼馴染がいるけど異性を意識した事無いし。案外そんなもんじゃないかと。」

「女の子らしい幼馴染じゃ無いから意識しないと。そういう事かしら？」まだまだ詩羽は棘のある言い方継続中？ひよっとして爆弾の導火線に引火しちやっただけ？いつの間にか加藤さんの相談そっちのけになってる気がする。

でもここで相談の話に戻しても『話を逸らしてる』って言われる気がする。そんな事がないのにそうなれば泥沼な気がするなく。さすがにそれは気が引けるな。

「そういう話じゃなくて。俺にはずっと好きな人居たし。その人と付き合う事できたから他の女の人は目に入らなかつたというか。それだけ。加藤さんも好意があるならちゃんとそれを口にしないと伝わらないと思うよ。」2人は暫く無言だった。

「なんか2人のラブラブっぷり聞かされただけな気がしたけど最後に意見くれてありがとうございます。今日は2人の貴重な時間奪ってすいませんでした。お邪魔しまし

た。」なんか明るい感じの返事を加藤さんから言ってくれたのありがたいな。

「こちらこそ。今度結果を報告をしてくれるとありがたいわ。私は倫也から聞ければ充分だから倫也に教えてあげて。」何となく詩羽さんも口調が柔らかい感じな気がする。『ラブラブ』って言われたのが嬉しかったのかな？ さつきまでの棘が抜け落ちているような気がした。

「相談にのつたし結果は気になる。でも焦らずにね。」何だか告白を急かしてるような感じもしたので急かしていい事を強調しておいた。最後にでは。と言い加藤さんが通話から落ち詩羽と、2人になった。

「加藤さんいるのに『好き』って言ってありがとね。私も嬉しかったわ。」詩羽が好き、って言うてくれたのかと思つてドキツとした。俺は明確に好き、と言つたわけじゃない気がするが『好き』って単語を聞いて心拍数が上がる。

「好きとは言つてない気が。でも…好きですよ。作家としてでは無く1人の女性として。」

さつきは会話の流れの中だったので改めて俺の気持ちをしっかりと口にする。さつき自分で口にしなないと伝わらないと言つたばかりだし実践しなきゃね。付き合ひだしてちゃんと思い伝えたのつて告白の時だけだった気がするし。

暫く無言だった詩羽から思いがけない言葉を言われた。

「私だつて好きよ。霞詩子のファンとしてじゃなく1人の男として。」

こんなにはつきり詩羽から好きって言われたの初めてかもって思うくらいドキッとしました。

六章 恋愛において「転」とは最も回避すべき事である

ゴールデンウィークが明けて学校が再開してから1週間。新社会人が最も退社していくタイミングで五月病が発症しやすいと言われている時期である。

俺のバイト先の不死川書店でもそれは例外では無かったらしい。バイトの俺1人じゃ社員の負担を減らす事が出来ずにその過酷な業務量に耐えきれずドロップアウトしてしまった社員が1人。そしてゴールデンウィーク明けなのに何故か連絡も無く無断欠勤し上司の右隣さんが連絡をしても一切繋がらないらしい。

まだ確定していないがこういう連絡も無くフェードアウトしていく社員が色んな会社で続出するそうだ。その度に「まったく、これだからゆとり世代は。」と愚痴をこぼすのが定番らしい。もうゆとり世代ではなくなつて暫くたつし若い世代を「ゆとり世代」と一括りされたくないからゆとり世代の方々にも頑張つて欲しい。

と、思いながら今日のバイトを終了し退勤して真つ直ぐ家に帰ってきてから直ぐにS k i pで詩羽と連絡を繋ぎオンライン勉強会を開き現在休憩中で今日の仕事を振り返つたところで今に至る。

俺は黙々と勉強を再開する。分からない所や疑問は聞いているが勉強が進み自己理解が深まってきていることから分かんなかった所や練習問題で間違えていた所等自分で調べている事が最近が多い。

Skipの向こうでは詩羽の執筆活動を物語るキーボードのタッチ音だけが部屋に響いている。

俺の予想では今『恋するメトロノーム』の最新刊の執筆が佳境を迎えてる所であるはず。

今回の巻に入る際は俺のバイトの面接の件を話し合ってくれていた時だから町田さんと念入りに打ち合わせをしていた事を思い出す。

ひよつとしたら終了が近いのでは？HPの発刊スケジュールを見てみると『(終)』の文字が表示されていないからまだ続くと信じてはいるけど今怒涛の展開が繰り返されているから終わらないと間延びしている感が出てしまいそうだがどうなのだろう!?

ちよつと聞いてみようかな？

「ペンの動きが止まっているようだけど。集中力切れた？」唐突に詩羽に勉強が進んでいない事が指摘された。お互いにやる事をやっているが通話を繋げている為気が付いた時はこういう感じで注意や声掛けが行われる事がある。これが離れていても2人で勉強している成果であるとも言える。

「詩羽に聞こうか悩んでる事があるんだけど。」

「集中力が切れる原因がそれなら聞いたらいんじゃない？ 答えられるかは質問の内容にもよるけど好きな体……」なんかいつものように変な会話の内容になりそうだったから、食い気味に質問してみる。

「恋するメトロノームって連鎖終了の話ってあたりする!？」

「……これは彼氏には話せない内容ね。と、言いたいところだけど。バイトとは言え不死川書店の社員やってるから伝わったかしら？」ちよつと沈黙があつたが答えてくれそうだった。

「はい。何となくそろそろみたいだな噂を聞きまして。」恐る恐る聞いてみる。

「そうね。そこまで聞いてるなら答えていいかしら。来月出る新刊のその次で完結する予定よ。」

「やつぱりそうなんですか。その次は何か書く予定何ですか？」覚悟はしていたがやはりシヨックを受ける。俺と詩羽を繋げてくれた作品が終了する。

バイト中の会話で何となく予想はついて信じないようにはしていたがいざ作者からシヨックだ。

でも作者としての詩羽を一ファンとして応援したいし彼氏として、作者として支えていきたい。だから書くのは続けて欲しい。

「連載経験ありだし私が次の作品を書く意欲があるから続けていけそうよ。最も次回作が人気出なければ打ち切りになるけども。」

打ち切りになればまた面白い作品が書けなかった場合契約が解除になる可能性もあるはず。でも次回作は書けそうなら作者としての詩羽を、霞詩子をこれからも応援していけそうだ。

「次も恋愛系ですか？」

「勿論そのつもりで町田さんとは話してる。似たジャンルだったら恋するメトロノームを終わらせる意味が無くなっちゃうから違ったジャンルになると思うわ。」

「え？ そうなんですか？ てつきりまた似たジャンルにするのかと思っていましたか。」

「うふふ。倫也のお陰で人気出たし実は連載終了は反対されたのよ？」 嬉しそうに詩羽は話している。パソコンには紅潮しながら照れ笑いを浮かべる詩羽が映っている。その笑顔を見て俺も照れてしまう。

「じゃあなんで？」

「恋愛において何かあった場合、その恋愛は終わるのよ。色々な意味で。」

「何かあったら…終わる？ それはどういう意味なんですか？」 どこに向けての言葉なのか確認する為に思わず聞いてしまう。

「さあ？ 作者として言える事は提示する事しか出来ないわ。それを受けて想像して答え

を出す権利は受け手である読み手にしかないからお任せするわ。」

「え!?! なんか怖いんですけど。それって俺に嫌気がさしたって事ですか!?! それで、終わり?」俺達の関係が終わりって意味を含むのか? まだまだ続けていける、って思ってるのは俺だけなのかな?

「そうねえ。私の恋人ったら色んな女の人に余所見してばかりだから。従姉妹紹介された、と思つたら今度はクラスメイト紹介されるし。」

「え? それは相談者として詩羽の方が適任だと思つて。」

「別に言いわ。そのくらいは。そんなに周囲で女の子に恵まれてる倫也が私と付き合つてくれる、私だけを見てくれるってそれだけで幸せだから。」

「ありがとうございます。なんかそうストレートに言われると照れますね。」

「もう。倫也から振つてきたのに何照れてるのよ。でも確かに小説でも私ってストレートに自分から愛情表現するって珍しいかも。」

「そうですね。唯の霞詩子ファンだと聞けない事聞けて優越感生まれます。」

「私の事独占できるのは倫也だけよ?」

「つて事はこのままでも大丈夫ですか?」

「そうね。私は特に不満は無いわ。恋愛小説を書いてる私が別に山があるような劇的な恋愛をしている必要性は無いわ。作者の起こった経験だけでしか書けない作家に価値

は無いと私は思ってるしね。」

「そうなんですか。事実は小説より奇なりって言いますしそうでなくても現実には小説より山がある可能性ありそうですね。」

「あら、私との恋愛に飛びっきりの山が欲しいならあげようかしら？飛びっきりの別れ言葉を用意する事くらい出来るわよ？」

「さつき否定したのにいきなり怖い事言わないで下さいよ。そんな事言ったら実現しちゃいますよ？」

話した事は例え嘘でも、適当な事でも言葉にしたら実現してしまう可能性がある。言葉という昔から言われているように。

「そうね。それじゃ飛びっきりのプロポーズでも用意しようかしら。私の連載終了記念の食事会として倫也と2人きりで楽しんでそれから薬指に指輪をはめてあげる。」

「それは普通に嬉しいです。プロポーズって普通男からじゃ無いですか？」常識的には何となく男からするイメージがある。

「あら。普通がいいなら私じゃ無い方がいいかもしれないわよ？」

「充分ですよ。詩羽を独占できるなんて沢山いる霞詩子ファンにバレたら○されてもおかしくない案件ですよね。」

「あら。私のファンってそんなに治安悪いのかしら？でも独占できるのはどうかしら

「？」

「え？どういふ事ですか？浮気宣言ですか？」

「ラノベ作家だからイラストレーターとただならぬ関係かもしれないわよ？」

「仕事の関係なら仕方ないですよ。多少の交流があるのは。」

「私達の仕事は滅多に会う事が無いから大丈夫だと思っただけね。でも世の浮気は仕事の関係から始まる関係が多いから気をつけた方がいいわよ。」

「気をつけます！ってなんの話ですか。これ。誰に対しての警告です？」

「詩羽のノリに巻き込まれてきたので突っ込んでみた。ホントにこれ誰向けなのだろう？ラノベ作家だからハーレム系主人公に送る言葉なのだろうか？」

「ところで、この前の恋愛相談の件ってどうなったのかしら。何か聞いてる？」

「え？まだ聞いてませんけど。特にそこまで仲のいい関係では無いですしこつちから聞くことも無いかと。」

「倫也にとつて加藤恵ってそんな存在だったかしら？」

「ですね。何回か教科書忘れた時に一緒に見せあつた事あるくらいですよ。」

「それってなかなかの関係じゃない？隣のクラスから借りてくれば済む話が隣に席くっつけて見せてもらうのって。倫也みたいに別のクラスに友達がいらない超絶コミュ障君なら偶然隣の席の人に頼るしか無いけど。あの子はそういう感じの子では無さそう

だったけど。」うーん。言われてみれば確かに別のクラスから遊びに来た女友達と話してる光景はよく見るぞ。

その子らから借りれば俺なんかと教科書見せ合わなくても良かったのでは無いだろうか？

俺は忘れた場合は頼らざるを得ないのは仕方ない。

彼女からのデイスに取られそうなその推理は大体当たっていきそうだ。

「何ででしょうね？ 実は前世では仲良かったのかもかもしれませんね。」

「いえ。前世では無く加藤恵と仲の良いパラレルワールドが存在するのよ。」

「パラレルワールド、別の世界線って事ですか？ あ、今期タイムリープ物とか異世界系多いですよ。確か。霞詩子先生の次回作はまさかそういう系ですか？」唐突に別世界の話をされたものだから次はそういう系の話で来るのかな、とピンと来て聞いてみる。そうじゃないならビックリする。俺が加藤恵と仲良くする世界ってとんな世界なんだろう？

「ちよつとその方向も考えつつ町田さんと打ち合わせしながら次回作も相談中よ。最もまだ今作はまだ完結して無いからその話はまだ詰めていないのだけど。」

「詰めていないにしてはスラスラ出てきたような。想定はあるという事ですか？」

「そうね。色々なパターンで話しているわ。でも今のパラレルワールドの話自体は私も

どこから出てきたのか分からないのよ。」

「作家の想像は無限大なんですかね？漫画でも週刊連載マジックが生まれるとか聞いた事ありますし。」

「そうね。そういう事にしておきましょうか。」

「ですね。俺も詩羽以外と付き合う選択肢なんて想像出来ないですし。」

「そうね。それじゃこんな時間だし倫也は寝ておきなさい。夜更かしは勉強の敵なんですよ。」

「そうですね。受験は短期記憶じゃなく長期記憶にしないと意味ないですから。寝て忘れた所を明日また復習する事にします。」

「そうしてお休みの挨拶をし合つて通話を切つて今日も幸せな気持ちで眠りにつくのだった。」

☆☆☆

『ライブの日決まった！夏休み！！土日だし来れるよね！』

学校の定期試験が終わって復習を終え夏の模試に向けて勉強しているとそこでそんなチャットが美智留から届いた。

すぐに詩羽に聞いたら『一緒に行きましょう。その日は次の日の昼くらいまで空けておくように。』

と返ってきた。これは、楽しみだ。美智留のバンドのライブも楽しみだがその後の予定が楽しみで仕方ないな。

翌日の授業中はニヤニヤが止まらなかつた。

授業が終わり昼休みに終わったところでいつものように話している。

「ね〜。恵？今日放課後暇？」

「今日なら全然いいけど〜。」

「私が作ったサークルが今ピンチでさ。助けに来て欲しいの〜。」

「サークル？私に出来ることならいいけど。流星にいきなりだと出来ることは限られるよ〜?。」

「勿論。恵に苦労はさせないわ。とにかく今日だけ。お願い。」

この通り、と深々と恵の友達を下げている。

「で、サークルって?。」

「ダンスサークルに入ってるの。この前部活申請を学校側にしたんだけど人数足りなくて同好会扱いになったんだけど1人今日学校来れなくなつて。監査の時にだけ頭数として来てくれるだけでいいから。」

更に深々と頭を下げる友達。でも休んでるだけなら人数合わせの要員いらなくね??

「え?でも休んでるだけなら私の頭数要員の幽霊部員いらなんじゃ?」

「あー、休んでるだけならね……」

「え!!辞めちやつたの??ひよつとして。」

「そうなんだよね。だからこの通り。お札に何でもするから!」

あーあ。『何でも』って言っちゃつた。これが俺なら恋するメトロノームの大人買いを勧めて売上に貢献する人増やそうと思つたが。加藤恵じゃそうはならないだろう。

何となく押しが弱そうだから安請け合ひしそうな気がする。何となく。そう思つてると。

「じゃ今度仲良い子がライブやるって言つてたから一緒に行く。高校生バンドしか出ないイベントって言つてたけど私怖くて。」

ん?その日って??美智留がやるライブの日でもあるよな。しかも高校生バンドばかり、って。

もしかして…一緒にライブ!?

え?まさか一緒にライブ行く事になる??

☆

「って事で。偶然加藤恵と一緒にライブ行く事になって。」

「あら。加藤恵がライブ行くなんて子じやないと思っただけ。どうしてそうなったのかしら。本格的に倫也狙ってる?」

偶然の一致だからしょうがないけどなんか誤解生まれてる!?

「いやいや。なんでもこの前の相談の相手の幼馴染の人がバンドやってそれでライブ誘われたらしいよ!?!俺が狙ってる訳じゃないからね?!」

「そう。そういう事。それってホントに偶然ね。」

と、言う事で偶然一緒に行く事になったのだった。

七章 バンドメンバーとそのファンがリア充って誰が決めた

夏休み初日。

「来週の日曜空いてたら来て！初ライブだから！」

元氣よく美智留が電話をしてきた。

中間も期末もギリギリだが赤点回避した美智留は夏休みにととう初ライブの日程を抑えたみたいでこの前の約束通り電話してきた。日程と場所を改めて伝えられた。

今は池袋で詩羽とデート中だったのだがそんな事はおかないなしに美智留は一方的に日時と場所を伝えてきた。デート中なのに他の女子と電話？って感じだが不在着信があるのに気が付き相手が美智留だったので詩羽が今折り返した方がいいと言われたのだ。

「って事だけど詩羽は大丈夫？」前にライブの話になった時詩羽はライブに行く事に多少ノリ気だったけどスケジュールは大丈夫かな？

「問題無いわ。次の話に向けて参考になるかもしれない新しい文化に触れられる新しい機会になるし作家としては逃せないわね。」

「次の話はバンドの話なんですか？」俺は何となく聞いて見た。詩羽の作風に合うのかな？という疑問が大きかったのだ。

「まだそこまでは決まってるじゃないのよ。恋愛の要素さえ入れれば私の作品らしくはなると思うからそこにどんな要素をくわえようかしら、って打ち合わせをしてるところなのよ。まだ練れてはないわね。だからかいい機会かしらね。」

「色々試行錯誤してるんですね。」俺は関心して相槌を打った。

「作家なんてそんなものよ。編集と打ち合わせて打ち合わせて出来上がった話が読者読んでくれるか分からないから色々考えるのよ。」

「大変ですね。色々とお疲れ様です。」その労いにすかさず答える。

「だから楽しいのよ。色々ね。」

作家ってカッコイイな。俺にはなれそうも無いや。

小説とか漫画を書けなくても沢山の人に協力してもらってゲームとかなら作れるのかな？

そんな世界線の話もある気がする。

いや、俺にゲームなんて作れるだろうか？今は無理な気がするなあ。

☆☆☆

美智留が初めてライブをやる日。

一緒に来た詩羽とライブハウス近くの喫茶店でお茶しながら待っていた。今日昼くらいからリハーサルが行われて夕方頃に迎えに来てくれるらしい。

詩羽と話しながら待っていると美智留がやって来た。

「お待たせ！リハが長引いちやって遅れたわ。」

時刻は16時半。開場が17時半って言ってたからまだ時間はあるかな。

「ライブ前に2人の時間が楽しめて楽しかったわ。」詩羽がフォローしつつ2人で楽しかったわ、というアピールをしている。

「お疲れ様美智留。リハどうだったの？初めてのライブで緊張してるんじゃない？」

俺は初ライブという事で緊張してるんじゃないかと思いついてみたがその質問を聞いた美智留は勝気な笑顔を浮かべ全然！と返してきた。

「本番前にこんな事していられるし余裕なんじゃないかしら？」

詩羽はいつものように皮肉で返す。

「色んなバンドのメンバーが友達とか知り合い誘ってるからリハ終わって割と待ち合わせてる人多いの。今日は学生バンドしかいないからどこもノルマ達成してレンタル料払うのに必死なんだ。」

「そんな仕組みになってるのね。」詩羽が納得の相槌を打つ。俺もそれと同時に納得した。学生でライブするのって大変そうだな。

「美智留のバンドはノルマ達成できそうなの？」

「それが私達は達成できてないんだ。倫也が霞ヶ丘先輩を連れて来たその2人だけ。」

美智留は残念そうにガックリ肩を落としている。

「え!?それってヤバいんじゃない?」

「ノルマの人数集められたらその分レンタル料払わなくて済むってだけ。」

「え?じゃあ払わなきゃいけないんだ。」

「元々メンバーの4人で支払いするつもりで今日は初ライブを経験するつもりだからいいんだよね。ゆくゆくはノルマ達成できるようになってバンバンライブやりたいけど。」

「あ、じゃあ今日のノルマはファンを1人作ることから?」

「今日いきなりファン獲得できるとは思ってないけど。いずれはファンができるようにして行きたいかな。」

そんな話を色々話していたら美智留が時計を見てソワソワしだした。

そろそろ向かった方がいいのかな?と思い「そろそろ向こうおうか?」と声を掛けて

3人でライブハウスに向かった。

美智留に案内された場所は地下に階段を降り受付を済ませたらそのままスペースが広がっていた。そこにはステージがあつてその正面に開場となる見るフロアが広がっている作りだった。

ライブの開演まで後1時間くらいはあるらしいが沢山の人が来て賑わっていた。

美智留は俺達しか呼べてなかったらしいが他のバンドの人達は結構呼べたみたいだ。考えてみれば今日来てる人ってそれぞれファンのバンドがそれぞれある人達が来てるからその人達が美智留達のファンになるって難しいのかな？

受付で入場料とは別にワンドリンク代を1杯分別に支払っていたのでバーカウンタ―に行きコーラを頼んだ。

バーカウンターはフロア内にあつたので会場に入りそのまま頼めたのはいい作りだな、と感じた。

これならライブ見ながらドリンク飲めるし便利な所だな。こんな感じなのかな？ライブハウスって。

詩羽は最初アルコールを頼もうと冗談を言っていたが未成年だからダメと窘めると烏龍茶を頼んでいた。

お酒は20歳になつてから。19歳以下の飲酒はダメ！絶対！

2人でドリンクを飲みながらワイワイしている会場の雰囲気を楽しみつつ話していると美智留がバンドメンバーと思われる3人と一緒に挨拶をしに来てくれた。

美智留を含めた4人に「初ライブ頑張つて。」と励ましていると見覚えのある女子が見知らぬ男子と一緒に歩いてきた。同じクラスの加藤恵だ。

「この前は相談にのってくれてありがとうございます。」

「いえいえこちらこそ。こちらこの前一緒に相談にのった彼女の霞ヶ丘詩羽です。」

「あらこの前の。どうも。霞ヶ丘詩羽です。」電話会議で自己紹介しあったが面と向かって会うのは初めてなので詩羽は改めて自己紹介をする。

すると「初めまして。その節はお世話になりました。蓮と言います。宜しくお願います。」

「って事は件の加藤恵さんの相談相手の?」

「多分そうなりますね。お陰様で恵と付き合う事が出来ました。ありがとうございます。」

「あら、残念ね。玉碎して倫也が加藤恵にアタックするチャンスが無くなって。」

「またそうやって冗談言う。初対面の人に対してその冗談はキツくないですか!？」

苦し紛れのツツコミにクスクス笑ってくれる蓮と言う加藤恵の幼馴染には感謝しなくてならないな。

「えー！蓮君と知り合いなの!? 倫也。」そんなやり取りをしてると美智留は羨ましそうに言ってくる。

「会ったの初めてだし話したのも今が初めてだけど。こっちの加藤恵さんとは同じクラスだし何度か話した事はあるくらい。」

それを聞くと美智留は加藤恵の方に向き驚きの声を発する。

「えー！ 倫也と一緒にの学校なの!? じゃあ頭良いんだ！」

「え、それ程でも。蓮君程じゃ無いし。」

「またまた。倫也と一緒になら結構良いところじゃない？」

「えっと。蓮君の通ってる高校は日本一偏差値高いとこだしそこと比べるとね。」

「学校はそうでも俺はそこまでじゃないよ。上には上がいるんだよ。」

なんて言う2人のやり取りを眺めて微笑ましく思う一方こういうとこに来る人ってやっぱりリア充なんだなあ、と実感する。

美智留もそんな2人にやつかみを言っていると蓮君の元に更に2人がやって来た。

「本番前に彼女とイチャイチャとは羨ましいなあ。」と言い蓮君の首をしめるフリをしなから首に腕を絡ませている。

「どうせならボクも混ぜろよ。後輩なのに生意気だぞ。」この人は男? 女? 性別は判断がつかない中性的な顔をしているが耳にピアスが沢山ついていて俺はこの人とは話さ

ないでおこうとそつと決意する。

「あ、今日は誘ってくれてありがとうございます。ごさいます。」

美智留が3人揃った所で挨拶をする。

「いえいえ。今日はトップバッター宜しくね。俺達のファンが結構集まってくれたから盛り上がってくれると思うしやりやすいと思うよ。」

相変わらず蓮君の首に腕をからませたまま美智留に挨拶を返してるこの人がリダーなのかな?と思ってるのと2人が挨拶をする。

「改めましてどうも。蓮と3人でバンド組んでるアキです。宜しく。」

「ボクは葉月。宜しくね。」

「カッコイイバンドだから倫也にはオススメだよ。」何故か美智留に推された。

リンコードン ティパスってバンド名だつて。覚えられるかな。

☆

話してみたらアキさんも葉月さんもそして恵さんの彼氏の蓮君もいい人達だったから話が盛り上がってしまい気が付くと時間が過ぎていつてしまった。

「じゃ、そろそろ私達は準備してくるね。」

美智留と3人が準備をしに向かつていった。

「3人は準備しなくてもいいの?」

「俺達は最終だからね。今日は5組出るから4組目のバンドが終わってから準備しに行くよ。」

「楽屋とか控え室みたいなどこには行かないんですか？美智留達が行きましたしそろそろライブが始まると思うんですけど。」

アニメでバンド物をちよつと見た事あるが何となくライブ前はメンバー同士で控え室にいるイメージだったから聞いてみた。

「俺達はなるべく他のバンドの演奏とか聞きたいから控え室にいる事って少ないかな。さすがにライブ組前には戻るけど。」

「そ。今日はトリだからこつちでたつぶりライブを楽しめるんだ。」

「じゃ、2人とも今日のライブは今日しかないので楽しんでいってね。」

「恵も前で見よ！俺達の演奏も最前で見て行って！」

蓮君が加藤恵さんを誘って4人でステージの前の方へ移動し最前列を確保していた。

3人ともごく自然に、当然のようにステージの前へと移動して行き加藤恵さんを連れて行った。

それを見て思った。

「ステージの前の方が楽しいのかな？」

「どこで聞いてても一緒なんじゃない？」

詩羽が何を聞いているんだろう？とキョトンとして答える。俺も同じような表情を
している気がする。

「だよね。後ろの方で聞いてようか。」

「一緒に聞きましょうか。」

部屋の照明が落ち暗くなった中待つてると入場曲が始まり美智留達のバンドが入場
してきた人影が見える。

「美智留達だ。初めてにしては堂々と入場してきたね。」音が凄く大きいので隣で一緒に
いる詩羽にも大きな声じゃないと伝わらない。

詩羽もこつちを向いて話しているのは口が動いているから伝わったが何を話してい
るのかは伝わらなかった。代わりに俺は詩羽の手をギュツと繋いで演奏を聞きながら
ステージを見る為にステージの方を見た。

様々な種類の照明が入場曲の音と共に近々しだしてステージが明るくなる。

すると「icy tailです。よろしくー！」

と言う美智留の挨拶と共に演奏が始まった。

さつきライブ前の雑談で美智留が作詞作曲をしたと言っていたという曲を5曲演奏
して美智留達の演奏が終了した。

初めて美智留達の曲を聞いたのになんとか懐かしい感じがした。何故だろう？

そしていざライブに来てみたら短かった。20〜30分は演奏してたと思うが体感時間だともっと短かった。それだけ良かったな。

ライブって毛嫌いしてたけどいいもんだ。美智留、誘ってくれてありがとう。

☆

icy tailのライブが終わり次のバンドが準備している間に美智留が帰ってくる。

因みにさつき聞いたがこの合間の準備の時間を『転換』と言うそうだ。成程。転換か。美智留に「ライブ良かった。」と素直に感想を伝えたら満面の笑みだった。

「そうだろう？」と肘をお腹に小突いてくる。

これからも私達がライブやる時来てよく？と言われる。

やはりファン獲得が目標なのでは!?当たり前やすい身内から当たってみよう、という作戦か!

「所でさつきの蓮君達のバンドの3人は前に言っちゃったけど、美智留達はどうする?」「え!?最前列いいなく。私は勿論前の方に行く〜!」と意気込んだ美智留はステージの前の方へ移動して行った。

icy tailの残り3人が残った。ライブ前に皆で話していた時に紹介はされただけどあまり話はしていなかったな。

「ところで、icy tailの曲って何となく懐かしさを感じたけどicy tailってアニソンとか普段練習してたりする？」

その質問を聞いた3人が目を輝かせながら答える。

「そうなんですよ。実は…」

と、icy tailのメンバーの内の時乃ちやんが答えようとした時に会場の照明が落ち暗くなった。

2組目のバンドのライブが始まるようだ。

☆

3組目のバンドが終了した。一旦会場が明るくなり4組目のバンドの転換に入る。

何となくだが懐かしさを感じた美智留達のバンドが良かったなうと思いい美智留に話しかけるとicy tailのメンバーの3人が話しかけて来た。

「だと思えますよ。私達は元々オタクなんでそういう音楽をコピーしてたんです。そこに美智留が加わって、最初は美智留も何の曲か知らないまま演奏してたんですけど。そこに影響されてると思うんで。」

「それで懐かしさを感じたんだ。オタク嫌いの気がある美智留にそんな事するなんて3人とも凄いな！」と素直に褒めると3人とも勝ち誇った顔をしていた。

「ところでその話を美智留にして良かったの？」

3人のカミングアウトに驚愕の顔をしている美智留の顔をチラツと見ながら3人に話しかける。

「全然。とうせずつと隠しておけると思っていますし。いつかは言おうと思っただので。初ライブをするって事だったのでいい機会かと。」

「3人とも。隠してないで教えてくれれば良かったのに。」美智留は3人に事実を隠されていたのがショックだったようだ。

「でもお陰で今もこうしてバンド続けていれる訳だし初ライブもできたし良かったんじゃない?」

「倫也の言う通りだけども。」美智留は不満げだった。

もしかして、バンド解散の危機!?

「これからもこういう曲作っていくなら秋葉原をまず主戦場にしてみたらどう?俺も今日曲聞いて感動したし、そういう人達多そうだからそっちの方がファン取れそうじゃない?」

「はい。ありがとうございます。次は是非ともそっちで行ってみる事検討してみます!」

「え〜!ホントにこの路線で行くの!?」

まだ美智留は不満げな感じだった。

そうか曲作って会場で披露して。

ファンを獲得できるように会場回ったり。宣伝したり。なんかこれって創作して、って感じだな。

☆

会場の照明が落ちた。

次はいよいよ蓮君達の演奏か。話してた雰囲気3人とも面白い感じだったし蓮君が彼女出来たことにブーブー言ってる2人には似た空気を感した。

もしかしたらバンドやってる人って事で毛嫌いしてただけで実は話し合うのかもしれない。

入場曲が始まった瞬間ステージの前の方で見ている人達は曲に合わせて飛び跳ねながら声を出し始めた。

会場の雰囲気さっきの4組目までの雰囲気と一変する。ステージ前方は勿論こっちの後方の人達もちろはら曲にのってジャンプしたりし始めた。

暗いステージに3人の人影が集いステージが照明に照らされた瞬間曲に合わせてジャンプしていた人達が更に発狂したように声を上げたり奇声を発している人達。

手が吹っ飛んでしまうかのような勢いで周りは拍手している。

こんなに熱狂しているファンが多いなら最初の icy tail のライブやその後

の3組のバンドのライブなんて記憶から吹っ飛んでしまうのでは無いか。

それだけのつけから会場の勢いが違った。素人目にもそれは明らかだった。

3人のライブが始まったら衝撃だった。

激しい曲にステージの前方でガンガン頭を振っている人達。そしてステージの前方で頭振っている人達の肩を叩いてその上へと飛んで行った美智留にも驚いた。

ライブ前はあんなに面白く話をしていたのにステージの3人はまるで別人のようだった。

何だろう。このエネルギーは。

激しい曲にドンドンと迫り来る衝撃に高まる胸の鼓動。

最終組という事で8曲の曲を演奏した。

会場が盛り上がるような曲もあり。静かに聞く曲もあった。

曲だけで来ている人を熱狂させるといふライブの雰囲気味わった。歌うだけで来た人を感動させ熱狂させるバンドという存在を知ってしまった。

俺はどんな面白いアニメを見た衝動よりも大きかった。霞歌子先生のラノベに出会った時の衝撃とはまた違った種類のものだった。

その後手拍子を鳴らすステージの前の方の人達。

暫くすると3人が着替えて戻ってきた。アンコールありがとう。って言っていたから手拍子はアンコールだったみたいだ。

アンコールって手拍子だけでいいんだ。

更にそこから2曲歌って今日のライブは終わった。

誘われて嫌々で行ったライブだったけど終わったらなんかしんみりした。

終わってしまったのか。あつという間だったな。

☆

カルチャーショック。今まで毛嫌いして遠ざけて来たがこんな世界があったんだ。それがライブが終わって改めて感じた感想だった。

まるで会場が1つになった一体感は今まで感じた事が無かった。好きなアニメやラブを読んでる人と話をして意気投合する事はあった。

でもその意気投合とは違った一体感を感じた。

言葉には言い表せない感動だった。

☆

ライブが終わって合流した美智留と3人のメンバーに感謝し、ライブを終えた蓮君達3人に感動した事を伝えた。言葉にはできなかつたし「凄かった。」という事しか伝えられなかつたけど。

「ありがとう。」演奏を終えた3人は満足気に答えてくれた。

「ところで恵から聞いたけど君も東田大学目指してるんだって?」

『ところで』の振り幅が大きくて俺はビックリした。なんで知っているんだろう!?! って衝撃もあつたけど。

「も!?! って事は蓮君も!?!」

「最高峰の高校には受かったし周りの流れもあるし。何より先輩達の誘いもあるしね。」とアキさんと葉月さんをチラツツと見る蓮君。

「え!?! お2人とも!?!」俺は更に衝撃を受ける。

「あれ? 言ってなかったっけ? 2人とも東田大学に在学中だよ。」

「あれ? 今日のライブって高校生だけって聞いたような。」

薄らといつかの教室で話した加藤恵さんとの会話を思い出しながら聞いてみた。

あれ? そんな話ホントにしたっけ? してなかったっけなく。確かに大学生いるしそんな会話そもそもして無かったのかもしれない。

「俺達は大学生だけどね。蓮は高校生だから高校生限定のライブにしてみようかな、と思つて今日のライブを主催したんだ。蓮から聞いたと思つていたよ。そっか。蓮とは今日が初対面だったもんね。そっか。倫也君もボク達の後輩になるかい?」

なんかアキさん饒舌? 普段はこういうお兄さんキャラなのかな?

「先輩になれるよう頑張りたいですね。まだまだ模試でC判定からB判定になったばかりなので頑張らないと。」

「勉強はやるだけ力になるし成績上がる時は一気に上がるから我慢してコツコツな。ストレス溜まった時はまたライブ来いよ。勉強の息抜きになるだろ？」

アキさんに直接誘われてしまった。嬉しいかも。

「いいんですか!?!是非誘ってください。なんか今日のライブ感動しちゃって。」

「おー!じゃ連絡先交換しようぜ。」

アキさんと連絡先を交換した。流れで葉月さんや蓮君とも交換し、icy tailとのメンバー達とも交換した。

新しい扉を開いてしまったかもしれない。

そんな予感がした。

この予感は本当に当たってしまった。

俺はこの日の衝動を忘れる事は無いだろう。

アキさんが去り際に振り返って俺に一言。

「あ、でもリア充ってのは頂け無いな。」

葉月さんがその言葉を聞き歩みを止めた。そして葉月さんからも振り返って一言。

「非リアになる事を祈ってるよ。」

2人ともイタズラっ子のような最高の笑顔を見せて去っていったなあ。

☆☆☆

衝撃の1日だったなく。密度の濃い1日だった。ライブ終わりに詩羽と2人でお泊まりしながら今日という1日を噛み締めた。

「ね。時間もあるしもう1回。」

最後は詩羽のアンコールが朝まで続いたのだった。

第八章 創作の醍醐味を知る事の第1歩を歩みだした日があるとするれば今日に違いない

高校2年のとある日の夏休み。

美智留に誘われたきっかけで衝撃の出会いがあった日の余韻と東田大学に現役で通っている先輩の励ましもかなり勉強が捗っている。

『高校2年の夏が受験の結果を左右するよ』なんていう一般論(?)の励ましもあったがそれを実践してきた先輩の生の言葉は自分で思っている以上の効果があった。

不死川書店のアルバイトでも東田大学出身の先輩もいるし様々なアドバイスや叱咤激励を受けながら使える時間を有効に使い着々と成績を伸ばしていると思いたい。

夏休みに受けた模試の結果を少し期待しつつも更なる向上に向けて勉強をしていきたい。

そんな中での詩羽とのオンライン勉強会と会って直接同じ空間で行う勉強会は何よりの癒しと励みになっている。

『最愛の彼女の為に』という思いは何より力になる。自分の想像以上の力が出ている気

がする。

もしかしたら『自分の為に』って思うより『最愛の人の為に』って思う方が力が出るのかもしれない。

アキさんと葉月さんが聞いたら「リア充め。」って言われそうだけど。

俺ってリア充な実感無いけど。もっとイチャイチャキてるカップル山ほど居ると思うし俺と詩羽カップルは『リア充』として恨まれるようなカップルではなさそうな気がするな。寧ろ『あ、2人付き合ってたんだ。』と言われる事の方が多そうな気がするな。

そんな事を思いながら勉強を再会しようとした時に蓮君からメッセージが入る。

勉強どうよ？俺達の次のライブが決まったぜー！今月末良かったら来いよ。

ライブのお誘いのメッセージだった。俺はあの時の興奮を思い出しながら返信したかったがまずは詩羽に相談のメッセージを送る。

今月末また蓮君達のライブがあるみたいです。一緒に行きませんか？

流石に執筆活動と学校で忙しくしてる詩羽はそう何回もライブに行けないかな？そう思いながらもメッセージを送った。

メッセージを送ったので勉強を再会。楽しみが増えたのが功を奏したのか集中力が増して能率が上がった。

気が付いたら結構な時間が経っていることに気が付いたら。これがライブに行く事

を決めた事による集中力ならこれからも定期的にライブは行きたい。

今まで学校・バイト・勉強の繰り返し生活になってきたがそこに加えて新たなアクセントになりそうだ。

最初は嫌々だったがライブに誘ってくれた美智留には感謝しなくてはいけない。

寝る前にスマホを確認すると詩羽からメッセージが返ってきていた。

ゴメンなさい。執筆が佳境に入っていて時間が取れそうに無いの。でも誘ってくれてありがとう。

勉強会も暫くオンラインになっちやうけど今度埋め合わせするから。

今修羅場を迎えてるみたいだ。昨日のオンライン勉強会ではそんな素振り見せていなかったけど詩羽の執筆活動を応援したいから仕方ないな。

応援のメッセージを打つところ。

いえいえ。大丈夫ですよ。気にしないでください。

執筆活動頑張ってください。新刊楽しみにしています。

ライブの方は前回楽しめていたようだし美智留を誘っておこうかな。

メッセージで聞くと速攻でオツケーの返事が返ってきた。

従姉妹だしこれ浮気じゃないよね？

☆

夏休み終盤のとある土曜日。

俺は初めて来た駅の近くの喫茶店でお茶しながら美智留を待っていた。

今日は蓮君達のライブを見る為にちよつと遠出をしていた。

今は単語帳を捲りながら美智留の合流を待つ。

スマホがチャットを知らせる通知音が鳴る。

美智留からだった。

準備に時間が掛かっているから待ち合わせ時間から30分くらい遅れる。

成程30分か。と再び単語帳を捲る。30分という時間はあつという間だったようであつという間に過ぎていた。

悪びれもせずに現れる美智留。

「今日は誘ってくれてありがとう。」

開口一番に感謝を口にしてくれたし許すとしよう。

「勉強してたらあつという間だったし大丈夫だよ。じゃ、行こうか。」

単語帳を鞆にしまい向かう準備をするとライブハウスの場所を聞かれたので答える
とちよつと休憩させて。と言われたので席を立ったが座り直す。

「こんな日でも勉強なんて熱心だね。」と美智留に言われた。褒められたのか皮肉なのか、どう返せばいいのか分からなかったが素直に受け取るうとは思わなかった。

「美智留はこういう日じゃなくても勉強しなくても勉強しないから留年が危ぶまれる立場にいるんだよ。」

前回留年危機の為に赤点回避の手伝いとして勉強会を開いたからこそ言える事を言っておいた。

それを聞いた美智留はあからさまに嫌な顔をしていたがそれくらい今回の事は堪えてもらわないと。

そうじゃないと肝心な時に力が出まい。

「だってさ。」不満げな顔をありありと見せていた。

だからだよ。と思ったが口には出さずその言葉は飲み込んだ。

「今度は危なくなる前に対処しなよ。そういう訓練の場なんだから。」せめてものアドバイスだ。ここで頑張ったら人生良くなるかは分からないが良くできるきっかけにはできるだろうし一言アドバイスするに留めた。

時間もライブの開場時間に近付きライブハウスに向かう事にした。

美智留が1度来たことがあるらしく案内してくれた。前回来たライブハウスは地下に降りていく所だったが今回は入口が1階にあり入るとロビーになっており受付のカウンターとドリンクを飲めるバーがあった。

ライブフロアが2階になっているようでドリンクを飲みながら寛いでる人がパラパ

ラいる程度だった。

「今日はライブフロアとバーが別フロアなんだ。」

ポツリと言ったら美智留が「前は同じとこにバーがあるとこだっけ？」と、聞かれ様々なタイプのライブハウスがある事を説明され知った。

美智留が色々説明してくれたってことはそれだけ色々なライブハウスに行ってるって事か、なんかいいな。

俺も色々なライブハウス巡れるかな？忙しいからちよこちよこ行くだけになりそうだ。いや、いずれ。この受検が終わったら！

そんな決意をしつつロビーでコインロッカーに荷物預けたり準備してからライブフロアに行くとも今日も前回のように来ている人がザワついていて前回来た時のあのライブの衝撃を思い出して心臓がキュツとなった。

一気に心拍数が上がり体温が上がってきた。ワクワクなのか何だか高揚している。

前回の興奮を体が覚えている、そんな感じだった。

蓮君とアキさん、葉月さんがフロアで話しており見知らぬ人達と話しているとこだった。

蓮君達に挨拶をすると今日のメインで最後にライブするバンドのメンバーだと紹介してくれた。

蓮君達は今回はメインじゃ無かったが6組のバンドがある中で5組目に登場という事で最初はどんなバンドなんだろう？と考えながら話に加わり主に美智留が会話に参加していた。

俺はと言うとそう言えば、そういえば今日は蓮さん加藤恵さんを選んでないんだ、と思っていた。

同じクラスの知り合いだし居たらいいなと思ったけどいかなかったのは残念。

☆

1〜4組目のバンドのライブが終わったが前回の icy tail や蓮君達のバンドのライブのように衝撃や感動が残るバンドはなかった。

何となく、何かが違うな。と感じてしまった。心にダイレクトに刺さるそんなバンドには今日は会わなかった。

次はいよいよ蓮君達のライブだ。これは楽しみだな。

いよいよ次という興奮が体の体温を上げていた。体が前回のライブの衝撃を覚えてるようだ。

心拍数も上がり転換の時間が死ぬ程長く感じた。これまでの4組のバンドの転換の時間と同じ時間か？と疑問を覚えるくらい長く感じた。

いよいよ入場曲が掛かり蓮君達がステージに入った。始まる！

3人が楽器を構える。

入場曲が消えると同時に演奏がスタートした。

ライブが始まり終わるまであつという間だった。

俺は今日最後の転換の間にフロアに戻って来た蓮君達に音楽の創作について何となく聞いてみた。

するとアキさんが答えてくれた。

「興味があるならやってみた方が早いよ。どんだけ言葉にしても表現できない事だし。体験してみないと始まらないよ。」

いきなりの誘いだったがいきなりの事でどうしていいか分からない。

そもそもやってみるにしても仲間なんて集まらなそうだし。バンドなんてそうなかなか組む機会なんて無いだろう。

「ねえ、君って楽器やってるの？」後ろからいきなり声を掛けられた。

驚き慌てて振り向くと「ああ、ごめんね。バンドを組むみたいな話をしてたから楽器やってるのかな？」と思つて。」

初対面で声を掛けられるなんてナンパか!?!なんて思ったが俺は男だし相手も男だ。

そんな事無いか。

いやいや、有り得なくも無いのか？多様性の世の中だしそういう人もいるのか？なんて色々考えていると言葉足らずだったかな？と更に言葉を重ねる。

「俺達メンバー探しててね。興味あるならどうか？と思つて。」

メンバー募集?!いやいや、『楽器やつてるなら』って事だよな。俺そもそも楽器やつて無いしお呼びでは無いよな？

そうしたらそれまで何も反応していなかった美智留が急に反応した。

「メンバー募集!?やればいいじゃん！倫也がやる気になったなら！楽器なら今から始めればいいんだし！募集パートは？」

俺以上に食い付いた。美智留が入るみたいだな聞き方だ。バンドの掛け持ちって部活の掛け持ちみたいに来るもんのかな？美智留ならしそうだな。

「あ、初心者だったんだ。でもやる気ありそうだしそれでもいいかな。リンコードンティパスのファンなら合いそうだし。」

なんか聞き覚えがあるような無いような横文字を聞きつつも何となく聞き流していた。

募集パートの事も種類よく分からないし何となくで聞いていた。聞いたの美智留だし。

ドラムとベースとギターいる、って言ったかな。

「じゃあギターとかキーボードとか？」

美智留が聞き返してた。あまりに美智留が詳しく聞いていたのでやはり美智留が入るのかな？ 掛け持ちとかでする流れなのかな？

「丁度いいじゃん。ギターなら私教えられるし。ね、倫也。」

「いいね。バンド始めるのと共に始めるの賛成だよ。この際だ。始めてみないかい！」

この人もやけにグイグイ来るな。美智留も改めて

俺を見つめてくるし。何故こんなにグイグイ来るんだろう？ 美智留の場合は明確に『私と一緒にこっちへ来い』的なオーラを感じるが。

でも本当に初心者だし辞めといた方がいいんじゃない？

躊躇していると声を掛けてきた同じ歳くらいの人が更に畳み掛けてくる。

「こういうのはほら。勢いって言うじゃない。騙されたと思って。さあ！ やろう！」
やらないか的な感じの誘い方辞めて欲しい。

これはどうした物か。

だがライブの熱で既に冷静な判断を出来ていなかったのかもしれない。

先程ライブを終えたばかりの葉月さんが「私もギター教えるから。」

みたいな後押しもあり勢いで首を縦に降ってしまった。

☆

翌日美智留と葉月さんとある街の楽器ショップに来ていた。

取り敢えずはまずギターを買いに。

昨日勢いで首を縦に降ってしまったがいざ始めるとなると時間は足りるんだろうか？ そう思いながらも昨日流れで約束してしまった為初心者用のギターを買いに来た。楽器に詳しくない俺は2人に聞きながら初心者用のエレキギターを購入。

その足で近くの喫茶店にいった。

昨日勧誘してくれた時は1人だったが今日は改めて3人で挨拶したいという事で今日来るのだそうだ。

怖い人じゃなければいいな。

そう考えてると昨日勧誘された人が声を掛けてきた。

「やあ。待たせたね。」

俺がこの世界線で創作活動を共にする3人との出会いになるのだろうか？

そんな思いをしながらドキドキして3人に挨拶をする。

「初めまして。倫也です。昨日始めようと思った初心者ですがお願いします。」

初顔合わせだし礼儀正しく行っておこう。喫茶店に到着した3人にご挨拶。初めてだし色々緊張するな。

「初めまして倫也君。」

「この前初めてライブに来たばかり何だった？こつち側に来たくなくなったその衝動分かるわ。」

昨日紹介された人に加えて2人に初めましてのご挨拶をされて席に着いた。

想像してるより年上っぽい癖がありそうな人達だ。初めての世界だし、そもそも初めましてだし緊張する。

「へえ。美智留ちゃんの従兄弟なんだ。それでライブに誘われてハマっちゃったのか。」

「ライブ来て、ハマってそつから直ぐに自分でもやりたいと思うようになるの早いね。やるね。倫也君。」

世間話をしつつ俺がライブにハマってしまったきっかけを話した。

三者三様の反応だったが初心者の俺でも受け入れてくれてるっぽい？第一関門は取り敢えず突破したかな？

「えつと。そう言えば3人の名前って？」

取り敢えずまだ聞いてない3人の名前を聞いてみた。

「あ、そつか。自己紹介まだだったね。ごめんごめん。俺の名前は因幡小亮（いなば こすけ）。小亮だからバンドでは『すけはん』って登録だから気軽にすけはんって呼んで

よ。」

俺をバンドに誘ってくれたのはすけはんか。なんか今思うと名前も聞かずにこの話乗った俺すげー！

って言うか話すと明るいなすけはん。最初会った時は怖い人だと思っただけ。

「俺の名前は出雲 太糸（いずも ふとし）。名前に糸入ってるからバンドでは『いと』って登録。気軽にいと呼んでね。」

この人は挨拶はしたけどあんまり話してないな。元々が無口な人なのかな？俺と一緒に初対面の人とだと緊張してるだけだったりして。

「僕の名前は美作 尚小（みまさか なお）。バンドでは『なおっち』で登録してるからなおっちと呼んで。」

お、この人はボクっ娘だ。凄い！あ、でも中性的な感じするけど女の子か分からないや。ボクっ子かな？なおっちか。男とも女とも推測できる名前だな。

「改めまして。安芸 倫也です。これから宜しくお願いします。」

改めて自己紹介したがなおっちに突っ込まれてしまった。

「ちよつと！硬い硬い。これから仲間と一緒にやって行くんだからもつと気さくに行こうよ。」

「え？でも年上ですよね？多分。さすがに気さくに行くのは……。」

「一緒にやっつく仲間やん？あんまり硬くなりすぎると窮屈やん？楽しくやっつこうや。」

と、年上だから流石にと思つて敬語で行こうとしたが更にすけはんに突つ込まれてしまった。

2人から突つ込まれたから次はいとの番かな？と思つて向き直るがここでも言葉を発する事は無かつた。

後ろでなおつちに『何か言いな』という事でなのか腰あたりを後ろに手を回し叩いて首振りでジエスチャーをしていた。

「まあ、初めての経験だし分からないこと多くて難しいだろうけど…自分のペースで慣れていけばいいから。」

あ、喋つた。優しい声で喋る人だった。

「そうします。楽器すら触るの初めてなので色々大変そうですね。」

「やりながら慣れてこつ！触つてれば上手くなるから。」

「触つてれば上手くなる、つて良く聞きますね。それホント何ですか？」

初心者故の疑問な気がするが聞いてみた。

「それはホント。いつも上手くなるよ。勉強得意ならそれと感覚は一緒だと思うよ。」
なおつちから励ましのコメントを貰えた。

「早速なおつちの楽器屋でギター買いに行こか？」

すけはんからまさかの提案だった。これからか。考えもしたかった。

「都合的には大丈夫ですけど。値段的にいくら位なんですか？」

手持ちままあまあるけど、楽器って高そうなイメージあるな。

「2万くらいあつたら初心者用のセットも含めて買えるかな？どう？足りそう？」

「それくらいなら全然。」

思ったよりはしない。普通に6桁行くのかと思つてた。より良い物となるとそうなっていくのかな？

どの世界にも上には上があるからな。

こうして俺は初めてのギターを手に入れ平日はオンラインでメンバーのすけはんに習うことになった。

土日で空いてる時は直前会つて指導してくれる時間も用意してくれた。

すけはんはロックDJもやっていてバンドとしてだけでなくソロでライブに行ったりしていたので毎週指導という訳ではなく不定期に行われたので指導が無い時は貰った楽譜のバンドの既に出ている曲や有名な曲らしくすけはんが『このバンドの曲は参考になる』というのを練習曲としてピックアップしてくれそれを1人で練習していた。

3人はメンバーが増えるという事でギターがもう1人増えるという事で既存曲を

ギターをもう1人追加した楽曲に編曲する作業にも取り組んでいるようだった。

4人の共有フォルダが作られオンライン上に徐々に楽曲のデモデータが追加されていた。

4人がそれぞれ作詞や作曲をしていき共有フォルダに入れてるのを確認して追加されている楽曲に歌詞や曲を作っていく新たな楽曲を完成させていくスタイルでやっているみたいだ。

3人は普段バイトをしつつバンド活動をしているようで一緒に会った時間に完成した曲を演奏してみても手直しを加えたりしているようだった。

この夏休みの間にメンバーの皆にかなり馴染む事ができた気がする。

夏休みが明けると学校行きながらバイトしながらの活動は時間的に難しい。

更に勉強の時間の確保が難しくなってきた。

9月に入って最初の土日。久しぶりに詩羽と勉強会で会っていた時にバッテリーの中の英梨々と上郷に会った。

池袋の喫茶店でいつものように詩羽に教えて貰いながら勉強していたら

「あれ？倫也じゃない？こんなところで何してるの？ひよつとしてデート中だった？」

「そうね。ようやく新刊発売まで漕ぎ着けたから記念にデートしているのだけ。見れば分からないかしら。そんな貴女に忠告しておく。デート中に他の男に声をかけるの

はどうかと思うわよ？お相手さんの心がザワついているでしょうから。」

詩羽が何故か俺に話し掛けてきた英梨々に毒を吐く。

「霞ヶ丘詩羽、そうね。色々言いたいところはあるけど。今日のところはここまでにしてあげるわ。」

貴女との確執は別の世界線で決着をつける事にしましょう。」

英梨々がここがパラレルワールドであたかも別の世界が存在するような口調だったが上郷がわざとらしく英梨々の腕を組んで連れて行った。

英梨々は俺の彼女だ。そう誇示するように視線を俺に向けて喫茶店を去っていった。付き合うまでは俺は教室で上郷と話をしていたのだがすっかり疎遠になってしまったな。

俺はふと思って詩羽に聞いてみた。

「そういえば英梨々って詩羽をフルネームで呼んでたっけ？」

「さあ？あの子に関して詳しくないし顔見知りという訳じゃないから呼び捨てにされる覚えは無いけれど。」

英梨々に対しての素つ気無い態度は『嫌い』と言うよりは『あまり知らない人』だから、って感じがした。

そりやそうだよな？霞ヶ丘詩羽と澤村スペンサー英梨々の仲が良いなんて一体何処

の世界線の話なんだ？

「さてー！また集中しますか！」

大学に入れるかどうかそれを占うこの忙しい時期にバンドに新規加入したりを言い訳にはしたくない。

その分勉強に費やせる時間が減ったならより集中していく。

折角の久しぶりの詩羽とのデートこんな感じで大丈夫か？まあいいか。詩羽も最終巻発刊に向けて執筆に集中したいだろうし。

☆

翌日学校にて俺は上郷に謝られた。

「昨日はゴメンな。貴重な幼馴染との時間だったのに。」

謝られはしたけど社交辞令な感じがして気持ちが悪い。

「全然。こっちもデート中だったしそっちもデート中だったんだろ？俺と英梨々があそこで話すのなんか違うし。」

「だよな。倫也がそう思ってくれてて助かったぜ。」

「ところでお前っていつから英梨々と付き合ってたんだ？前に紹介はしたがまさか付き合っているとは。」

意外な組み合わせに驚いた。オタク友達として絵師の英梨々を紹介はしたがまさか

付き合っているととは思わなかった。

「何となく流れで?」

曖昧な返答だったが恋愛って案外そんなものなのかもしれない。これはある意味真理なのでは!?

ロマンチックな告白とか実は創作の中だけのかげ離れた話で実はリアルな恋愛なんてこんな何気無い感じなのかも。これが小説なら終わってるけど。山も落ちも無く盛り上がる要素が無くて読んでて味気無い。

☆

「って友達と会話して。恋愛の曲を書きたいと思つてまして。」

「俺達あんまり恋愛の曲やってないんだよなく。ガラじゃないと言うか。合わないなつて気がして。」

夜オンライン会議中。今日はメンバー全員での会議になったので提案してみた。

「面白くないじゃない?それでこそ一人加えた意味があると思うし!」

「じゃ、歌詞書いてみます!初めてなんで書いたらチェックお願いします!」

許可が降りて俺は生まれて初めての作詞に挑戦する事に。

何気無い友達との会話だったけどヒントになったかもしれない。

「但し愛とか恋とか好きとかそういう直接的な言葉使わず書いてみて。」

付け足すように枷を追加された。恋愛の曲なのに直接的な表現を使わずにつて難しくはないか!?

「つて事で生まれて初めて作詞に挑戦する事になりました。」

バンドでのオンライン会議の後は詩羽とのオンライン勉強会。

勉強会開始前に詩羽に報告した。

「あら倫也も遂に創作をする側になるのね。ようこそこちら側へ。」

「いやいや。詩羽みたいにプロとしてじゃなくてアマチュアなんでまだそちら側という訳では。」

『こちら側』と詩羽に言われて慌てて否定した。

「でも曲ができたならライブで披露するんですよ?それならアマもプロもないわ。お客様に提供する立場になることに変わりがないでしょ?」

「いやいや。まだ披露するか分かんないですし曲として完成するか分かんないですよ。」
「勉強大変そうだしね。でも応援してるわ。どんな形であろうと倫也が私と一緒に産みの苦しみを理解できる事を。」

「苦しみを出来ることを応援してるんですか!?どうせなら完成を応援してくださいよ。」

「まだ完成させたことも無いのにそれを応援してもらいたいなんて100年早いわよ。彼氏と言えどその発言は許せないわね。」

不穏な空気を感じて慌てて発言を撤回する。

「クリエーターの先輩として叱咤激励お願ひします！」

「分野も違うし私がアドバイス出来るかなんて分からないけれど出来ることがありそうならいつでも相談にのるわよ。クリエーターとしての先輩として。」

詩羽が嬉しそうな感じがしたのは聞き間違ひじゃないだろう。

俺は途方も無いクリエーターへの道にワクワクした。

俺のこれからの音楽活動がこれを機に盛り上がっていったのはまた別の話。

☆

今日は週末だから久しぶりに詩羽とデート中。

この前はデート中に英梨々と出くわしたが今日は同じクラスに加藤恵とばったり出くわした。

「あれ？こんなところで偶然だね。」

「あー、そうだねー。安芸君こそこういうところ来るんだね。意外だったよ。」

棒読み感の強いフラットな口調で話していたが場違い感を指摘されているのが否めない。

迎えに座る詩羽がまた違う女の子と話してる。ってオーラで不満気な顔を向けてく

るので同級生の女の子とは適当に挨拶だけして会話を打ち切った。

その後不機嫌を直してもらおうとあれこれしようとしたのだが「そんな時間あるなら問のひとつでも多く、英単語のひとつでも多く覚えなさい。」と言われて素直に勉強するのだった。

特に山もなく詩羽と順調に仲良くしながら勉強をしていた。

☆☆☆

模試で成績が上がり詩羽も一緒になって喜んでくれたり成績が下がれば落ち込む俺を励ましてくれた。

そして霞詩子先生としては新連載『純情ヘクトパスカル』をスタートさせていた。

パートナーが男みたいなペンネームだったが顔合わせしたら女の子で助かったとか何とか。

本当は読者としてはその辺の裏事情なんかは聞かない方がいいし聞く機会なんて無いんだらうけど。

これは彼氏としての特権だろうか。

年が明ける前には早応大学に推薦で合格してからは俺への勉強と執筆活動に専念し

てくれた甲斐もあつて俺は合格にグツと近付いた。

仕事が忙しいとかで卒業式を欠席してその夜に俺と2人だけの卒業式をした。

詩羽らしいな。卒業したのは俺の方だったのかもしれないが。何とは明言しないけどね。

☆

入学式、別に親しい後輩が入ってくるわけでもなく部活等に属してる訳でもないので新入生が入ってくることに取り立てて期待やワクワクなど無かった。

新入生が入ってきた所で別に何か日常が変化するわけでは無い。

普通に平日が1日過ぎるだけだ。

図書室で残って勉強したがそろそろバイトの時間が迫っていた為そろそろ下校しようとか校門を通り抜けた時そこで待っている女の子に話しかけられた。

「やっと会えました。先輩！」

九章 これって運命?さあ分からんね～

新入生が入学してきた日の放課後俺は学校から出てバイトに行こうとすると昔馴染の後輩に呼び止められた。

“そこにいるはずの無い後輩”の呼び掛けにバイト先へと急がねばならない俺の足が思わず止まってしまった。

「まさか……波島出海ちゃん!」

「はい! 倫也先輩を追ってやって来ました!」

満面の笑みでこんな所で“追って来た”は不味くないかい!?

「え〜と…転校以来だっけ? 積もる話はあるかもしれないけど。バイトあるから急いでるんだ。話はまた今度ね。」

「はい。ではまた明日、学校で。」満面の笑みで手を振っていた。

☆

「って事があったんだよ。」俺はその日の夜、詩羽とのオンライン勉強会の際に最愛の彼

女に報告がてら何も無い事を弁明する機会を設けられていた。

と云うのも俺が1年生の可愛い後輩と話をしてるのを詩羽の友達が見ていたよう
でどう言つた内容かは詳細が分からないけど詩羽の元へ報告が入つたようである。

「その後輩ちゃんと倫也がどういう知り合いなのかは今は和えて聞かないことにするわ
不倫理君。」

「ちよつ、その呼び方…完全に何かあつたと想像しているじゃないですか。何も無いん
ですつて。小学校の頃にオタク趣味を進めたことで師匠と当時言われていただけです
よ。」

「なるほど。何も無いと。でも男と女である以上これから何かある可能性はあるじゃな
い？私はそこを聞いているのが分からないかな？不倫理君。」

ダメだ。こうなると弁明の余地は無いのかもしれない。何も無い事を今後の関係
で見せていくしか無いのかもしれない。

「大丈夫ですよ。今後何もこれからもそういう関係になる事はありませんから。ほと
んど交流もないと思いますし。俺には詩羽しかいないしね。」

「あら、関わらないなんて寂しい事言うじゃない。いいのよ私は別に。その方がネタに
は困らないし。」

「これから書くであろう小説のネタの話だよね!?なんか含みある言い方しないでくださ

い!?!」

「あら不倫理君なのに倫理的な事守ろうとするの偉いじゃない。」

何か意味ありげな笑いが聞こえたと思つたら詩羽がとんでもない事を言い出した。

「私にも紹介して欲しいなあ。その後輩ちゃん。」

「分かった。気は重いけど…これは俺の罪でもあるし。」

「罪……?」

最後に詩羽が訝しげに呟いた。

☆

「やあ、倫也君。久しぶりだね。まさか君の方から会いに来てくれるなんて思わなかったよ。」

軽薄な笑みを浮かべ軽口を浮かべるこいつは久し振りに会つても嫌味つたらしかった。

「あれ?伊織?俺は出海ちゃんを紹介したかっただけでお前に会うつもりなんて無かったんだが。」

「誰なの?はっ!まさか倫也くんとお友達なの!」

少し「お友達」の発音に違和感を感じたけど気のせいかな?一瞬と、じゃなくてほつて聞こえたような。

いやいや気のせいだよな？あえて突っ込まない方がよさそうだ。
広げたら面倒なことになりそう。

「詩羽の察した通りだよ。昔からの友達だったんだけど出海ちゃんが家の事情で引越
しちやつてね。」

「どうやら出海ちゃんを呼んで彼女に紹介しようと思っていたのだが伊織は俺に会え
ると聞いて着いてきたみたいだ。」

「やだなあ。倫也君。今僕は出海のプロデュースをしてるんだ。敬愛なる霞詩子先生を
ご紹介させて頂けるとなるとビジネスチャンスの匂いを感じて僕がその機会を逃すは
ずないじゃないか。」

「そう。この男は俺みたいなオタク趣味全開で自分で費やすのを尻目にそこに稼ぎ所
を見付けた為に昔俺に近付いただけだった。」

「それで言い争いになって引越し前に仲違いしたのだけど…。」

「同人ゴロとして成り上がっただけじゃないか。俺は伊織みたいな真似は認めない。」
「そう敵視しないでよ倫也君。昔とは違って今はちゃんと稼いでいるよ。」

「信用できないな。」伊織が有望な絵師達を囲って荒稼ぎしていた過去を思い出す。

「こいつの金儲け至上主義の一方的なスパルタで絵を描く事を辞めてしまった人も多
いというのに。」

小学生や中学生の単純な思い付きから生まれたものだった。

今やバイトとは言え広報を担当してる俺としては見逃せないところである。

「私は不死川書店に所属してるから個人で営業とか仕事をする事はできないわ。内容によるけど具体的な話があっても一旦話だけ持ち帰らせて相談させてもらおうし。面倒だからビジネスの話ならお断りよ。」

詩羽は大人な対応ができています。これなら俺が必要以上にいがんでも仕方ないか。

「そういう事だ伊織。力になれなくてゴメンな。」

「もう！お兄ちゃんつたらすぐ仕事の話にするんだから。」

それまで黙って俺たちのやり取りを見ていた出海ちゃんがようやく口を開いた。

「相変わらず兄には苦労してるみたいだね。出海ちゃんも。」

この兄と長年付き合っているとなると同情の気持ちも湧いてくる。ご愁傷さま、そういう気持ちで出海ちゃんを見ると台詞とは正反対の表情をした出海ちゃんがそこにはいた。

「でも、それでこそ伊織なんだよね〜。」

「え……」

俺は思わず長年そう呼んでいるのが当たり前かのような出海ちゃんの伊織へのその呼び捨てがあまりにも自然に聞こえて衝撃を受けた。

俺のその驚きが表情に出ていたのか出海ちゃんが慌てて言った。

「あわわ、今のは忘れてください先輩。」

チラツと出海ちゃんは伊織を見た。

いつものスカした表情で「別に怒ってないよ。」と出海ちゃんに微笑みかけた。

そして俺を見て付け加えた。

「倫也君なら分かってくれるさ。」

俺を射抜くように見てそう言った。

そのやり取りを見た詩羽は何かを察したのか「降りてきてたわ。そういう事だったのね。」

と眩き狂ったようにノートにペンを走らせていた。

……今度の新作、兄に恋する妹が出てくるのかな？

それにしても出海ちゃんと伊織って付き合ってる？ 兄妹で？

まさか！ 引越し先で、あるいはこつちに戻ってくる期間の間に兄妹仲がよくなっただけさ。

変な勘ぐりは止めておこう。

☆☆☆

「それであなたはあの妹さんと今後どういう接し方をしていくつもり?」
「……っ!?!」

それは伊織と出海ちゃんと4人で会った日の夜のいつものオンライン勉強会中に最中詩羽に唐突に投げかけられた疑問だった。

俺は言葉につまる。いつかはされると思っていたがなんの脈絡もない時に質問されて。

答えも用意していなかったから答えにつまる。

それまで積分の難解な式の計算方法やら幕末の日本のここは試験に出やすいやらそういう会話が続り広げられていた中突然にだったし。

いつか聞かれるとは思っていた。けど答えが出ていなかったなので聞こえなかったフリをして勉強を続ける。

「おーい、難聴系主人公君は聞こえないフリを貫くのかな?」

「え?ゴメン。計算に夢中で気付かなかった。で、何だっけ?」

俺はあくまで聞こえないフリを貫く。

「不倫理君の不倫相手が実はお兄ちゃんにお熱だったって話。どうするの?フラれたお相手さん。」

「不倫相手だなんてそんな。俺の潔白は証明されたでしょ？俺は普通に先輩で出海ちゃんはヲタク趣味の教え子だけだよ。」

聞こえないフリなんて手段が通じる相手じゃなかったたのであっさり引き下がる。だが事実は事実として伝える。言葉のニュアンス的に本気で浮気や不倫だと思ってるとは思えなかったし。

2人との接し方の距離感に困っているので取り敢えず遠回しに我関せずなスタンスを表明していこうと思う。

「あら、さすが倫理君。兄妹の恋愛なんて世間が許さないから腫れ物は見てもぬフリと言うことかしら。師匠と慕われておきながら酷いわね。」

さっきまで不倫疑惑をかけて責めてたのに途端にこれ。やっぱり本気では無いようだ。いつものように俺をイジる詩羽の笑顔が浮かんでくる。

確かに見てみぬフリはできない間柄ではあるんだよな。伊織とは昔確執があつて付き合いは無くなつていて会う義理は無いにしろ。

出海ちゃんの事となるとそうでない…のかもしれないけど。

「あれは出海ちゃんの選んだ道だし。外野の俺達がとやかく言うことじゃないかと。その為に紹介されたんだろうし。それに俺達の勝手な推測しているだけでホントにただ仲の良い兄妹なのかもしれないしね。」

「あら、ラノベ業界じゃ兄妹愛なんて昔トレンドになったのよ。どの出版社も今や手を出している、と言っても過言でないジャンルのひとつよ。」

「それは架空の話であつて。実際に兄と妹で付き合つたなんて事になつたら風当たりが。」

「だからこそ周りが見守つてあげないと。その為に私達に紹介してくれたのよ。行くべきよー!」

有無を言わせず反論の余地を与えないよう結論を突き付けてくる詩羽。今そのラノベ業界で恋愛モノを書かせたら右に出る者はいない、と世間では言われている霞詩子先生はあの兄妹にご執心のようだ。

余つ程興味が湧いたのかな?あの兄妹に。

「俺はそつとしておいた方がいいと思うけど。いきたいの?詩羽は。」

「当然じゃない。どうしたの?厚かましいくらいに色んな事に首を突っ込んで今や創作活動に身を置くあなたらしくない。」

どの世界線の話だろうか。俺そんなに厚かましかつたかな?嫌、自分でそうじゃないって思つても他の人を見るとそうじゃないのかも。でも今回に限つてはそうでは無い。と思える行動をしたい。

「それでも、だよ。あの2人には触れるべきじゃない。」

「なんでよ。いつものあなたなら……」

何かを言い淀んだ詩羽はそれ以上俺に何かを追求することは無かった。

☆☆☆

あれから1ヶ月。詩羽は波島兄妹に取材と称し色々話を聞いているようだ。

俺は受験勉強や学校とバイトを両立しながらたまにバンドの練習に顔を出している。

この前の模試の結果が思ったより伸びてなかったので勉強に重点を置いた為合わせの練習は久しぶりになる。

休憩中にちよこちよこギターは触っていたが。

作者作曲に関してはピンと来ない。

結局今期流行ってるアニメの曲を弾いてみたり好きなアニソンを弾いてみたりに終始している。

「勿論勉強が忙しくてそつちよりも、って事もあるんだけどね。」

「あら、誰に言い訳しているつもりかしら？」

すかさずオンライン勉強会をしている詩羽からツッコミが入る。

「詩羽はどう作品作りしてる？」

「そうね。私はスイツチが入ったらどんどん文章が生んでくるって感じかしら。」

「スイツチかあ。なかなか入らないんだよねえ。」

「そうね。きっかけは絶対に必要だと思わね。私の場合はモデルにした子をじっくり観察する事で降りてくることもあるわ。」

「降りてくる。カツコいいですね!俺も降りて来て欲しいものですよ。モデルかあ。」

「勿論私の場合は小説だしあなたの場合は歌だし。勝手は違うと思うからそつちの世界の悩みはそつちの世界に聞くのが一番だと思わよ。」

「そうですね。ありがとうございます。」

メンバーに相談しながらそろそろ作ってみたいな。先輩とクリエイターの苦しみだけじゃなくて喜びも味わいたい。

☆☆☆

夏休みで時間もあつたし久しぶりにメンバーと合わせ練習をした後に歌を作りたいと相談した。

取り敢えずは歌詞だけ書いてみるということになりジャンルを恋愛の歌という事に決まって解散した。

「詩羽との恋愛の心情とか書いてみようかな。」

色々試行錯誤しながら駅に向かって歩いてみると見知らぬ男と手を繋ぎながら仲良く歩く美智留を赤で信号待ちしている交差点の向こう側で発見した。

「え!?!美智留?」従姉妹のデート(?)現場を見付けて事実かどうか、本人かどうか確認したいと思ひ信号が青に変わって直ぐに走って向かいの交差点を渡った。

既に雑踏に紛れて2人の姿を見つける事は出来なかった。

十章 まさかの倫也君!?

美智留のデート疑惑を見掛けたかもしれない次の日たまたま時間のあつた詩羽、出海ちゃんが学校近くのいつもの喫茶店に集まり美智留がデートしていた男に関してあれこれを話していた。

「お年頃だしバンドマンの人達ってお盛んなんじゃない？それに仲良いからと言って付き合つてるとは限らないんじゃない？」

「それは偏見だよ！そういう人達ばかりじゃないんだから！」

詩羽がとんでもない偏見を持つたので全力で否定する。

「あら、でも男と2人で会うという事はそれなりの関係ではあるんじゃない？嫌いなら2人で合わないでしょ？」

出海ちゃんは話を聞き領きながらもスケッチブックに描く手を止めずにいた。

「でも友達なら2人で歩いてる事も多いんじゃない？チケツトノルマとかもあるし男が多い界限でもあるし。たまたま友達と歩いていただけなのかも。」

「たまたま……ね。」

詩羽が含みをもたせながら言った所で出海ちゃんは手を止めて言った。

ねこんな感じのお2人って事だったという事でしようか？」

スケッチブックには仲良さそうに手を繋ぎ歩く男女の後ろ姿を描かれていた。

「そうそう。こんな感じ」

「こうして絵で見ると雰囲気ある。」

出海ちゃんが絵で起こすと更に信びよう性が増した気がする。

「絵から良い雰囲気があるけどデフォルメされすぎているわ。昨日倫也から聞いた話だと男の方が腰に手を回していたらしいからこんな爽やかな雰囲気ではなかったはずよ。」

「事実を捏造しないでよ！俺は手を繋いで信号待ちした所をみただけでそんなところは見てないって！」

噂話に尾ひれが付きそうだったので激しめにツツコミを入れていつもの詩羽節を否定しておく。

3人であれやこれやを話をして色々な推測を重ねた結果今度会う機会があったら質問攻めしようと言う事になった。

「ところで出海ちゃん、学校ではどう？こつちに帰ってきたのは久々みたいけど。」

「伊織…お兄ちゃんがすごい所から仕事取ってきて。仕事が忙しくて学校の人とはそんなに話せてないんです。」

「学校に通ってる人をコキ使うなんてスパルタね。どんなところで仕事してるの?」

「rouge en rougeってところなんですよ。知ってます…よね?」

出海ちゃんが遠慮がちに言った。

「rouge en rouge!」

俺と詩羽は声を合わせて驚いた。あまりの衝撃を受けて席から立ち上がってしまった。

「あの紅坂朱音の所か。オタクの師匠として鼻が高いよ。出海ちゃんがそんな伝説級の人のところでお世話になってるなんて……。」

「あの、倫也センパイ?ちよつと震えてないですか?」

そんな出海ちゃんの指摘を無視してそつと肩に手を起き慰めの言葉を添える。

「出海ちゃん、辛いことがあったらいつでも言うんだよ。」

「あ、ありがとうございます!」

微妙に困り顔になりながらも笑顔をくれた弟子の顔を見てこの日の会合を終えたのだった。

☆☆☆

学校が終わって不死川書店でのバイトも終えて帰り道を歩いていた終電も近くなつたそんな時間帯。

なるべく早く家に帰って少しでも勉強時間を確保しようと足早に街を歩いていたその先に気になる光景が目に入った。

あまりに衝撃的だった為に自然に先を急ぐその足がつい緩んでしまった。

向こうから歩いてくる2人組があまりに知った顔だったからだ。正確に言うとその1人男女組み合わせの内の女の子の方がよく見知った顔だったからだ。

先日詩羽や出海ちゃんと噂していた美智留だったからだ。

前回見た時は手を繋いで歩いていた所を偶然発見したが今回は美智留が男と腕を組み歩いていた。

親密度が前回発見した時より明らかに前より上がっていないだろうか？

声を掛けるべきか否か。躊躇していたら美智留と目が合ってしまった。
挨拶をするべきか？そう思っていると。

「あれ？倫也じゃん。こんな時間にどうしたの？」

美智留に先に声を掛けられた。

「俺はバイト帰りだよ。美智留は？」

「私？私はデート帰りだよ。紹介するね。従兄弟の倫也だよ。」

と腕を組む男に紹介してくれた。

「つす。」

聞こえるかどうか微妙な声量で美智留の彼氏(?)に挨拶された。

「ああ。どうも。従姉妹の倫也です。」

その微妙な空気を察したのか美智留がフォローする。

「あつはは。ゴメンね。コイツコミュ障でさあ。初対面の人とはいつもこんな感じなの。」

そのフォローに照れ臭そうに後頭部を掻きながら会釈した。

あれ？最初に嫌な感じした気がしなくても無いけどこの人嫌いじゃないかも。折角だし馴れ初めとかなんやらとか色々聞きたいけど……。

一流石に2人の時間を邪魔できないか。後日ゆっくり話聞きたいなく。思っていたところ美智留から声を掛けてきた。

「立ち話もなんだし場所変えようか。」

☆

「って何で俺の部屋なのさ！」何の疑問も無く俺の部屋へと流れた美智留にようやく突っ込む。

「まあまあ。この時間となると場所って限られるじゃん。私は別にそういう場所でも良かったけど？」

妙にそういう場所にアクセントを置いてニヤニヤしながら従姉妹が言ってきたから涼しい顔してやり過ぎす。

「いくらなんでもそういう場所に顔を出すような無粋な真似はしないから安心してよ。」
相変わらずニヤニヤしてる従姉妹はさておき。

「って事で今日は2人が加わるからゆっくり話聞いておいてよ。」

俺は部屋にはいないもう1人にも話しかけておく。

「心配しなくとも根掘り葉掘り聞くから安心してちょうだい。」手をわきわきさせる詩羽がパソコンの画面越しに生き生きした表情を浮かべていた。

俺は帰ってきて早速机に向かって勉強を始めたが3人は再び自己紹介をし合って馴れ初めを話始めていた。

俺も3人の話をたまに聞いていたがどうやら男は元々は美智留のバンドのファンだったらしい。

歌っている美智留に一目惚れしたらしい。

憧れで惹かれ近付き付き合うとこまでいったのか。

この人俺と似たもの同士なのかも。

「あなた倫也と似てるわね。」

詩羽も同じこと思ってたみたいだ。

「分かったわ。あなたの事を倫也に似てるからともなり君と呼ぶ事にするわね。」

「いや詩羽。それだと漢字にすると俺と一緒の名前になっちゃうから良くないかと。」

「あら、それなら折角名前が一緒だから倫也君と呼ぼうかしら。」

「え、名前一緒なの？」

憧れの人と付き合うってとこだけじゃなくて名前まで一緒なんかーっいつ!!!

決して口にはしなかったが俺はツツコム気持ちを抑えられなかった。

最終章

クリエイターと云うは死ぬことと見つけたり

「って事だったんだ。いやまさか同じ名前の人と付き合っているとは思ってもよらなかったね。」

俺はそう2人に報告した。

あの日あれやこれや美智留が付き合っている人のあれやこれやを噂した人達とプラスアルファにだ。

何故だかこの場には出海ちゃんと伊織が加わっていた。更に幼馴染の澤村スペインサー英梨々も混じっていた。

なんでも出海ちゃんが昔からライバル視をしていて紅坂朱音に世話になる現在に至ってもライバルと思っているらしい。

そうした関係がいつしか強敵と書いて『とも』と読む関係になっっているらしい。

「ふーん。そうなのね。あんたは従姉妹の事どう思ってるのよ。幼い頃は何だかんだ仲良かったんでしょ?」

英梨々はそう茶化して来るのだが「確かになく。」と呟きながらも昔を思い出す。

昔はよく田舎で野山をかけたものだ。懐かしいな。

今は迫り来る現実を前にしてその余裕は無いんだけど。

「何遠くを見つめる目をしてんのよ！」

そうツツコミを入れられてハツとして周りを眺める。

報告を終わって思うところがなかったのかどうか。

真実は分からないがそのツツコミを機に彼女以外の皆が立ち上がった。

「夏休みとは言え、夏休みだからこそ忙しいからそろそろ行くね。」

英梨々のその一声でみんな挨拶をして部屋から立ち去った。

「さて、私も締め切りが近いからそろそろお暇するわね。」

名残惜しそうに詩羽も立ち上がる。

「それじゃ倫也君。最後の追い上げ頑張つてね。夏を制する人が受験を制すんだっけ？」

「つてよく言われるけど別にここまで制して来てるから夏だからといって特別では無いよ。今まで通り努力を積み重ねるだけさ。」

「そ、大変そうだけど頑張つてね。」

「勉強はいいよ。努力した分だけ点数として現れてくれるからね。」

言下に含みを持たせつつ。クリエイターとしての活動は努力がそのまま形になると

は限らない。

努力してもそれを裏切られ酷評されることも少なくない。

それを誰よりも先輩として歩んでいる詩羽は感じ取ったのか微妙な表情をしつつも励ましてくれた。

「それでもいつか報われることはあるわ。運が良ければね。」

そう言い残し立ち去った。

運も実力の内。その通りだ。どんなファンを引き当てるか。どんなマネージャーを引き当てるか。世界は違えど人との縁等運に頼る要素を上げ出したらキリが無いほど成功という2文字には運の要素が絶対的に付きまとっている。

詩羽には俺というかけがいの無いファンであり精神的支柱と巡り合えた。俺も精神的支柱になっている。

後は、根強いファンにも巡り合いたいものだ。

「よしー」そんな願いはさておき夏休みの貴重な時間を勉強に費やす為気合いを入れ直すのだった。

☆☆☆

バイトは変わらず、バンド活動の比重は落としながらの受験勉強は学校での中心に代わり夏休み明けからは名のある進学校であるウチの高校でも最後の追い込み体制に入っていた。夏休み明けからは進学希望の生徒には授業の一環として受験対策の講習が行われていく。

そんな嵐のような日々があつという間に過ぎ去つていき合格発表当日。

俺は念願の超一流大学への合格を勝ち取っていた。

高校へ発表に行くとは高校としては久し振りの合格者となつたので校長先生や理事長まで出てきて盛大に万歳で祝われた。

バイト先ではバタバタ忙しいながらもお祝いされた。

「大学在学中もバイトとして宜しく！」

と元氣よく言われた後はいつものバイト風景だったけど。

夜はちよつといいビジネスホテルを取ってくれた詩羽が朝まで夜通し祝ってくれた。

「これからもファン1号として、クリエイター仲間として、何より彼女として。これからも宜しくね。」

「(イ)ち(イ)そ宜しくお願ひします。」

合格発表の翌週は高校の卒業式だった。

何だかんだ席の近い事が多かった加藤恵さんから大学合格を祝ってもらった。

「おめでとうー。なんか凄いとこ受かったみたいだねー。」

「ありがと。あ、彼氏から聞いた感じ？」

「そんな感じ〜。あ、そういえば伝言。」

そして加藤恵はスマホを見て言った。

「先で待つ。ファン1号と2号より。だって」

俺が受験勉強に励みつつもバンド活動をしていたら蓮君達のバンドはメジャーデビューが決まった。

本人から報告を受けてから知った。

話によると秋にデビューし全国にファンを増やしているんだとか。

凄いな。

俺の手にも力が入る。これからはクリエイターとしてバンド活動も懸命にしていかなくは。

その道がどういう方向に行くとしても悔いだけは残さない。

プロを目指すからには命を懸けて。

でもそれは粗末に扱うと言う意味では無い。
極みじかにクリエイターとしての師匠で先輩で憧れのその人に近付きたくて。
俺はその道をこれから歩むんだ。

☆完☆